宮城県文化財調査報告書第 153 集

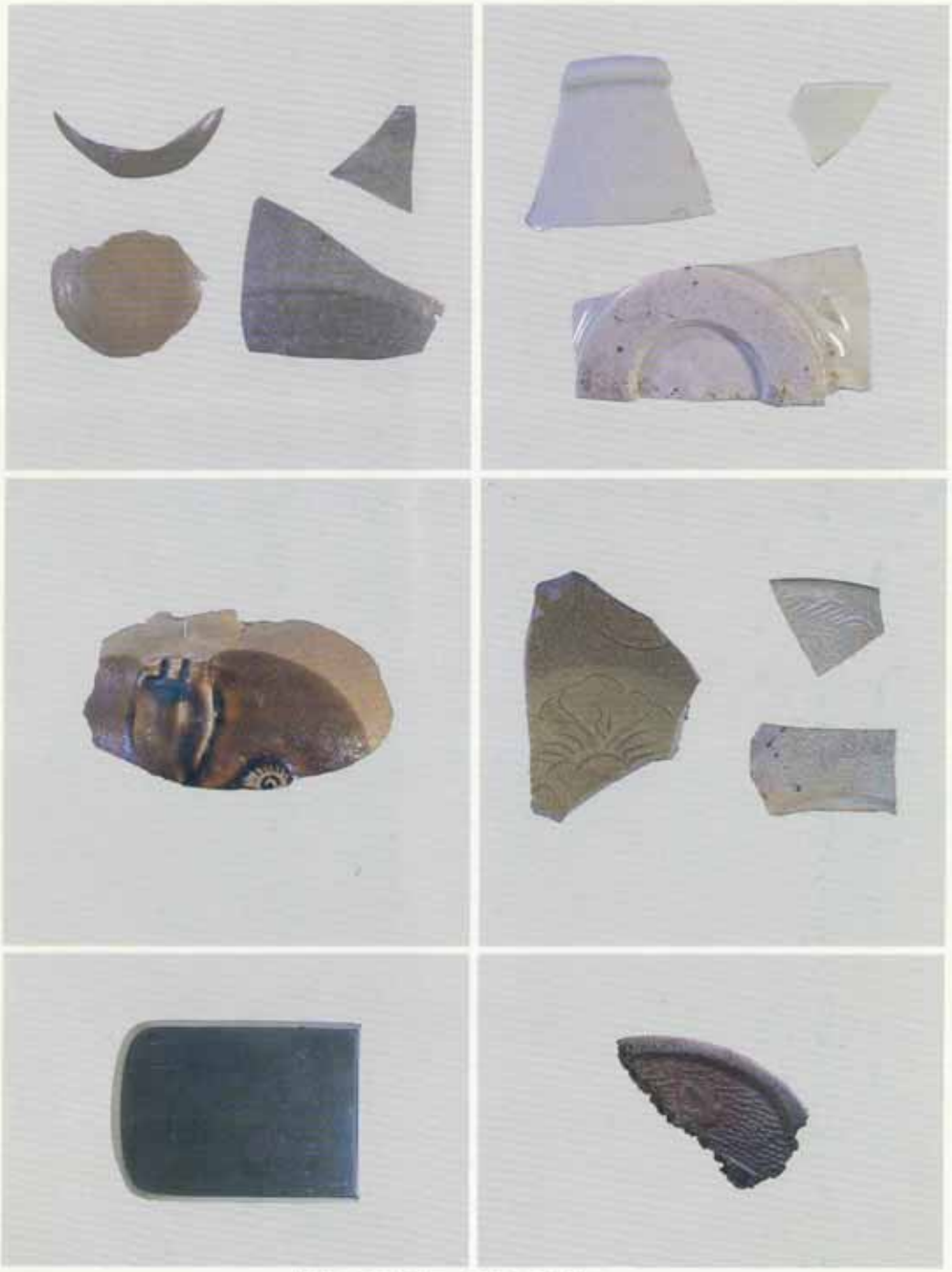
山　王　遺　跡

－多賀前地区第１次調査－

仙塩道路建設関係遺跡平成４年度調査概報

平成５年３月

宮 城 県 教 育 委 員 会
建設省東北地方建設局



上段左：越州窯系青磁　上段右：邢窯系白磁
中段左：長沙窯系黄釉　中段右：緑釉陶器陰刻花文
下段左：石帯　下段右：銅鏡

序　　文

宮城県には、数十万年を遡る時代から各時代にわたって数多くの埋蔵文化財が存在することが知られており、これらは豊かな自然と長い伝統の中で培われ、育まれてきた貴重な遺産であります。このような、かけがえのない先人の文化遺産を保存し活用するとともに、将来に伝えていくことは現代に生きる私たちの大きな責務と考えられます。

したがって、近年各自治体が歴史と風土に根ざした地域の活性化を推進するために、郷土にある文化財を再認識し、保護・保存するにとどまらずそれを特色ある地域づくりの拠点として整備し活用していこうとするところが多くなっていることは、まことに有意義なことと存じます。

改めて申すまでもなく、埋蔵文化財は文献などに記録されていない地域の歴史を、具体的な物質的資料に即して解明することができる貴重な歴史資料であるばかりでなく、その地域に住んでいる人々とって最も親しみやすく、精神的なよすがともなるものであります。

しかし、埋蔵文化財は土地と深く結びついてこれまで保存されてきたという特質をもっており、そのため各種開発事業によって絶えず破壊・消滅のおそれにさらされております。当教育委員会としては、開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

本書は開発関係機関等との協議・調整に基づき、平成４年度に当教育委員会が実施した発掘調査の成果を記録したものであります。これらの成果が地域の歴史の解明と文化財保護思想の高揚のために役立てていただければ幸いです。最後に協議にあたり各遺跡の保護調整に理解を示され、調査にあたっても多大なご協力・ご支援をいただきました関係機関各位、および発掘調査にあたられた皆様に深く感謝申し上げる次第であります。

平成５年３月

宮城県教育委員会教育長　　大立目　謙　直

例　　言

1．本書は建設省東北地方建設局仙台工事事務所が担当する仙塩道路建設計画に伴う山王遺跡多賀前地区の調査概報である。

2．調査の主体は宮城県教育委員会であり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。

3．本書における土色についての記述にあたっては『新版標準土色帳』（小山・竹原；1973）を利用した。

4．本書の第１図は５千分の１の多賀城市都市計画図を複製して使用した。

5．発掘調査の測量は、山王遺跡八幡地区に設定した原点の国家座標Ｘ＝－188,880.000、Ｙ＝13,230.000をもとに東西・南北の基準線を延長し、調査区内に3m毎の方眼を組んで行った。

6．発掘調査および整理・報告書の作成に際しては、次の方々および機関から指導、助言を賜った（以下敬称略）。

楢崎彰一（名古屋学院大学）、田中琢・岡村道雄（文化庁）、岡田茂弘・阿部義平・平川南・小野正敏・高橋照彦（国立歴史民俗博物館）、山中敏史（奈良国立文化財研究所）、亀井明徳（専修大学）、宇野隆夫・前川要（富山大学）、井上喜久男（愛知県陶磁資料館）、百瀬正恒・中村敦（京都市埋蔵文化財研究所）、山本信夫（太宰府市教育委員会）、関口廣次、高野芳弘（東北歴史資料館）、進藤秋輝・丹羽茂・真山悟・柳沢和明・村田晃一（宮城県多賀城跡調査研究所）、高倉敏明（多賀城市教育委員会）、滝口卓・石川俊英・千葉孝弥・石本敬・相沢清利（多賀城市埋蔵文化財調査センター）、鈴木拓也（東北大学大学院）

東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所、多賀城市埋蔵文化財調査センター

7．本書は調査員全員が協議しながら、執筆・編集した。

8．本書とこれまでに刊行された調査概報および現地説明会資料等で内容が異なる場合は、本書がこれらに優先する。

9．発掘調査の記録や整理した資料・出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 1
Ⅱ　遺跡の概観 1
Ⅲ　調査の方法と経過 2
Ⅳ　調査の概要 5
　(1) 層序 5
　(2) 遺構 5
　(3) 遺物 18
Ⅴ　調査の成果 21

調　査　要　項

遺 跡 名：山王遺跡多賀前地区（宮城県遺跡地名表登載番号 18013）
遺跡記号：ＦＸ
所 在 地：宮城県多賀城市市川字多賀前
調査面積：約 13,000 ㎡
調査期間：平成 4 年 5 月 11 日～12 月 25 日
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：小井川和夫・後藤秀一・菅原弘樹・岩見和泰・高橋栄一・吾妻俊典
　　金子勇一・窪田忍・吉野武・東理浩明・古川一明・三好秀樹
調査協力：建設省東北地方建設局・東北歴史資料館・宮城県多賀城跡調査研究所
　　多賀城市埋蔵文化財調査センター

Ⅰ　調査に至る経過

仙塩道路は、亘理町中泉を起点とし、岩手県宮古市に至る仙台湾高規格幹線道路の一部で、東北地方建設局仙台工事事務所が建設を担当する仙台松島道路利府中Ｉ.Ｃ.から仙台市中野に至る7.1ｋｍの路線である。

仙塩道路の計画決定に伴い、宮城県教育委員会は、東北地方建設局仙台工事事務所からの依頼を受けて、昭和57年3月に路線敷地内の分布調査、昭和63年11・12月に山王および市川橋遺跡の確認調査（第1次調査）を実施した。その結果、山王遺跡では極めて濃密な遺構の存在が確認されるとともに、自然堤防上に隣接する市川橋遺跡、六貫田遺跡においても、路線敷のほぼ全域に遺構の存在が推定された。

道路建設に伴う本格的な調査は、多賀城Ｉ.Ｃ.予定地（山王遺跡八幡地区）を対象に、平成元年度より宮城県教育委員会と多賀城市教育委員会が分担、受託する形で行われ、これまでにＩ.Ｃ.調査対象地約43,000㎡のうちの約19,000㎡を調査した。今年度は、道路本線部分の調査を優先して行うこととなり、県教委が山王遺跡多賀前地区約13,000㎡、市教委がＩ.Ｃ.内の本線道路部分約3,000㎡について東北地方建設局から受託し、調査を実施した。

なお、本概報は県教委が実施した分の調査成果をまとめたものであり、市教委受託分については別途調査概報が刊行される予定である。また、昨年度からの継続で、4月6日～5月28日に実施した多賀城Ｉ.Ｃ.内の本線部分（約400㎡）の調査成果については、来年度以降の県調査報告書の中で述べることとする。

Ⅱ　遺跡の概観

多賀城市は市域のほぼ中央を流れる砂押川によって東・北部の丘陵地帯と、南・西部の沖積平野とに二分される。

山王遺跡は仙台平野の北東端に位置し、砂押川と七北田川とによって形成された東西に長い自然堤防上に立地している。この自然堤防上には新田遺跡、市川橋遺跡、六貫田遺跡も立地している。遺跡の範囲は多賀城市山王および南宮を中心とする東西約2ｋｍ、南北約1ｋｍの広範囲にわたる。今回の調査区は本遺跡の南東部にあたる多賀城市市川字多賀前地区で、ほぼ砂押川に沿っている。付近の標高は約3～3.5mである（第1図）。

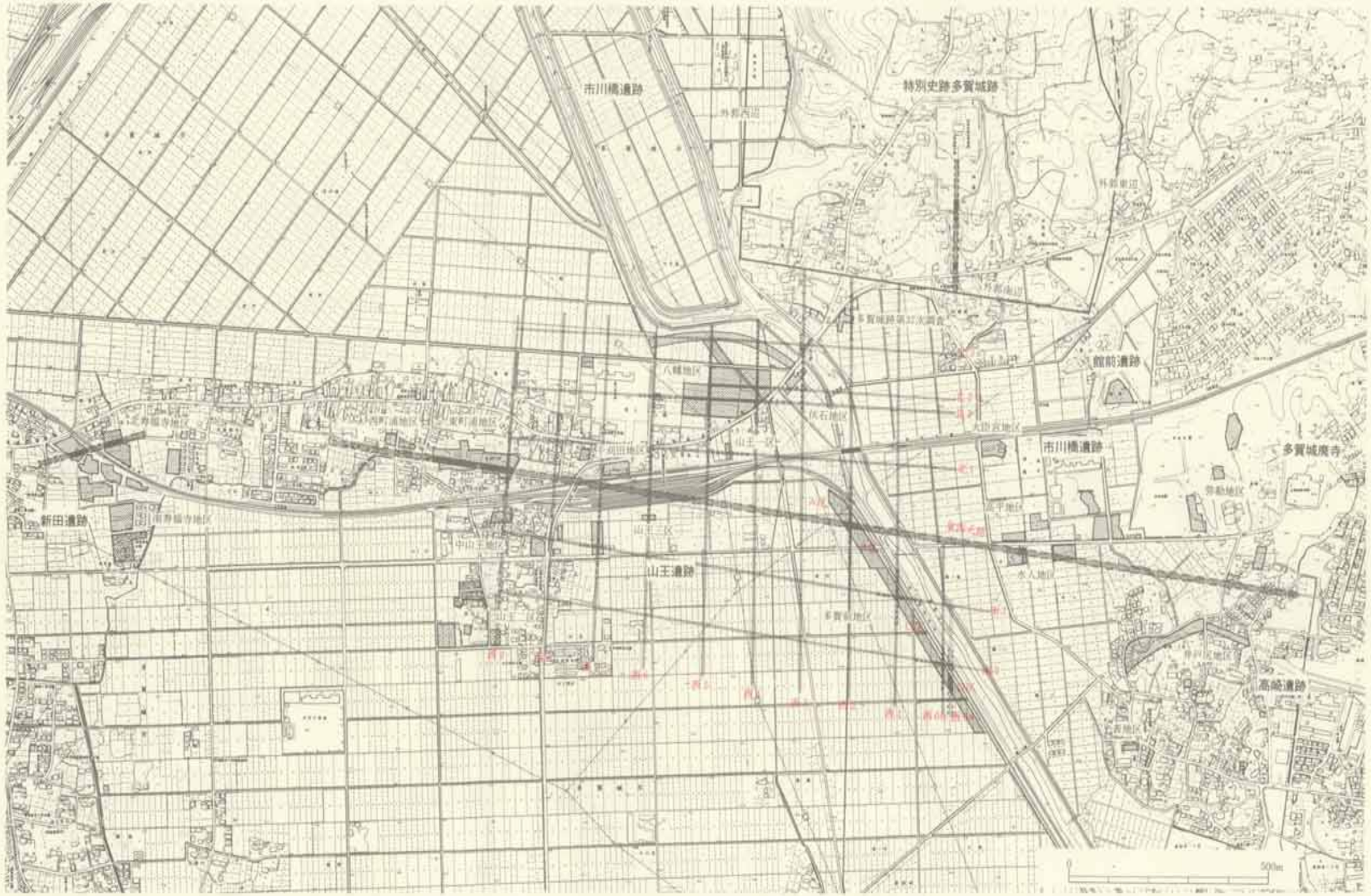
本遺跡の周辺には北約1ｋｍの丘陵上の特別史跡多賀城跡をはじめ、館前遺跡、多賀城廃寺など、多賀城と密接な関係をもつ遺跡や寺院跡が存在する。このように本遺跡は古代の国府周辺地域の様相を解明する上で重要な位置を占めている。

山王遺跡は、これまでに宮城県教育委員会と多賀城市教育委員会によって多くの調査が実施され、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世の遺構や遺物が多数検出されている。古墳時代の遺構は山王二区・西町浦・東町浦・八幡の各地区で検出されている。とくに八幡地区では中期と後期の竪穴住居跡が多数検出され、また中期の遺物包含層からは多量の土師器とともに石製模造品、木製品、骨角製品などが出土している。奈良・平安時代については多賀城跡との関連から遺構・遺物とも非常に多く、道路跡、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、溝跡、土壙などが多数検出されている。東町浦地区では多賀城跡外郭南辺築地とほぼ平行する幅 12mの東西方向の道路跡が、また八幡地区では多賀城跡政庁中軸線と方向がほぼ一致する東西および南北方向の道路跡が検出されている。そして千刈田地区では国守の館跡とみられる建物跡が発見されている。

Ⅲ　調査の方法と経過

今回の調査は、昨年度の試掘調査の成果を踏まえて実施した仙塩道路建設に係る確認および事前調査である。調査地は、多賀城市市川字多賀前の地内を南北に縦断する高架橋路線敷内で、多賀城Ｉ.Ｃ.の南東に位置する。調査対象地は路線幅 15～30m、総長約 700mの約 13,000 ㎡で、このうち道路橋脚および農業用水路の付け替え工事に係る約 2,500 ㎡については、事前調査を必要とした。調査にあたっては、まず調査区全域の確認調査を実施し、平面図の作成および航空写真の撮影を行い、その後工事に係る部分について事前調査を行うといった工程で調査を進めることにした。調査は 5 月 11 日から開始した。

調査の結果、東西道路跡 3 条、南北道路跡 3 条、庭園跡 1、掘立柱建物跡 74 棟以上、竪穴住居跡 20 軒、塀跡数条をはじめ、井戸跡や土器溜、土器埋設遺構、水田跡、小溝状遺構、溝跡、土壙、河川跡などの遺構を多数検出した。これらの中で道路跡は、これまでに古代陸奥国府多賀城の周辺で検出されている道路跡の延長やこれらと平行するもので、多賀城の城外における方格地割の存在を確定的なものとした。さらに今回の調査では、東西道路跡と南北道路跡の交差点を 3 ヶ所で検出し、道路跡で囲われた 4 区画内（北からＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区）の利用状況についても、部分的にではあるが明らかにすることができた。とくに幅 12mの東西大路（ＳＸ10 東西道路跡）の南に面したＢ区では、区画のほぼ中央部を占地する庭園跡や廂付の建物跡をはじめ多数の建物跡が東西大路と方向を揃えて配置されていること、また庭園跡周辺を中心に輸入陶磁器や多量の施釉陶器が出土することなど、平成 2 年多賀城市教育委員会によって調査され、「国守の館」と推定された山王遺跡千刈田地区と同様の性格をもつ区画である可能性が考えられた。そこで、Ｂ区のとくに庭園跡を中心とした区域についての協議を行い、道路供用開始の時期や経費、工法上の諸問題など



第1図　山王遺跡の位置と周辺の遺跡

の検討を経て、工事に係る部分を最少限にとどめるよう、橋脚位置の変更が行われた。この結果を受けて、10 月から事前調査対象地の調査に着手した。その後、10 月 17 日に現地説明会を開催し、12 月 25 日に今年度分の調査（多賀前地区第 1 次調査）を終了した。しかし、今回の調査において、事前調査対象面積約 2,500 ㎡のうち、A・B区にあたる約 1,500 ㎡については調査を完了することができなかった。未買収地を含め、来年度改めて調査を行う予定である。

現地説明会

Ⅳ　調査の概要

（1）層序

調査区は標高 3～3.5mの自然堤防上にあたり、調査前は水田として利用されていた。水田耕土・床土（Ⅰ層）の下には、上からⅡ層：黒褐色シルト層、Ⅲ層：黒色粘土層、Ⅳ層：褐灰色砂質粘土層、Ⅴ層：灰白色火山灰（10 世紀前半に降下）、Ⅵ層：整地層、Ⅶ層：黒色および褐灰色シルト層の堆積が認められ、その下Ⅷ層が黄褐色砂層となる。このうち、Ⅱ～Ⅳ層はA区西半部およびB区中央部から北西部にかけて認められ、大部分の遺構はこれに覆われる。Ⅶ層はB区中央部から北西部にかけての旧河川あるいは自然の窪地に堆積した奈良時代後半頃までの堆積層で、Ⅵ層はこの窪地を整地した人為層と考えられた。Ⅷ層は均質な自然堆積層で、奈良時代以降の地山土である。Ⅷ層上面の標高は調査区の北半部で約 3m、南端部で 2～2.5mである。

（2）遺構

今回の調査では、道路跡、庭園跡、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、土器溜、土器埋設遺構、塀跡、水田跡、小溝状遺構、溝跡、土壙、河川跡、柱穴など多数の遺構を検出した。これらはすべてⅠ～Ⅳ層の下、Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ層の上面で検出した。ただし、これらⅥ～Ⅷ層は地点によって分布範囲が異なっており、道路跡や庭園跡、大部分の掘立柱建物跡などは、遺構面としては同一のものと考えられる。また、B区北西部やC区中央部で検出した掘立柱建物跡や溝跡などの一部の遺構の中には、埋土にⅢ層起源の黒色粘土が多く含まれているものもあり、Ⅲ層堆積時あるいは堆積後にも遺構面が存在していたと思われる。

現時点では調査および遺構・遺物の整理が中途であることから、以下においてはⅠ～Ⅳ

層下の遺構を取り上げ、とくに道路跡とこれに囲われた区画（A・B・C・D区）についてその概要について述べることとする。

1．道路跡

本遺跡をはじめとする陸奥国府多賀城の周辺では、これまで東西・南北の道路跡が多数発見されている。中でも多賀城外郭南辺築地（E-7～8°-S）と方向がほぼ一致する幅 12mの東西大路は、多賀城外郭南門にとりつく想定南北大路とともに、多賀城周辺における主要道路と考えられている。これらの大路と交差する幅 2.5～7mの狭い東西・南北の道路についても真北あるいは南辺築地の方向を基準としており、とくに南北道路についてみれば、政庁中軸線の延長上（想定南北大路の道路心々）を起点に、おおよそ 110～135m間隔で約 1.1㎞西まで延びている。これにより、少なくとも多賀城の城外南西部では、方向や間隔に多少のばらつきがあるものの、一定の計画にもとづいた方格地割が行われていたことが明らかになっている。

今回の調査では、東西道路跡 3 条、南北道路跡 3 条と、3 ヶ所でこれらの道路跡の交差点を検出した。ここで、これらの道路を仮に東西大路と想定南北大路を基準にして割り付けると（註 1)、東西道路跡はそれぞれ東西大路、南 1 道路、南 2 道路にあたり、南北道路跡は西 0ａ・ｂ道路(註 2)、西 1 道路、西 2 道路にあたる（第 1 図)。それぞれの道路の路幅や方向、間隔などについては、第 1 表に示した。ここでは東西大路（ＳＸ10）について、説明を加える。

	道路跡	路幅(m)	方向	大路との距離(m)	備考
東西道路跡	東西大路	約１２	E－約8°－S	―	市4・8次の延長（相沢:1990）
	南１道路	3～7	東西大路にほぼ平行	約１３５	市13次の延長？
	南２道路	約3	東西大路にほぼ平行	約２７０	
南北道路跡	西０ａ道路	7以上	ほぼ真北	―	盛土の道路（側溝なし）
	西０ｂ道路	5以上	ほぼ真北	―	
	西１道路	3～7	ほぼ真北	約１２５	
	西２道路	7	N－約1°－E	約２６０	宮多研37次の延長（白鳥:1981）

※　路幅は側溝心々間の距離で示した。

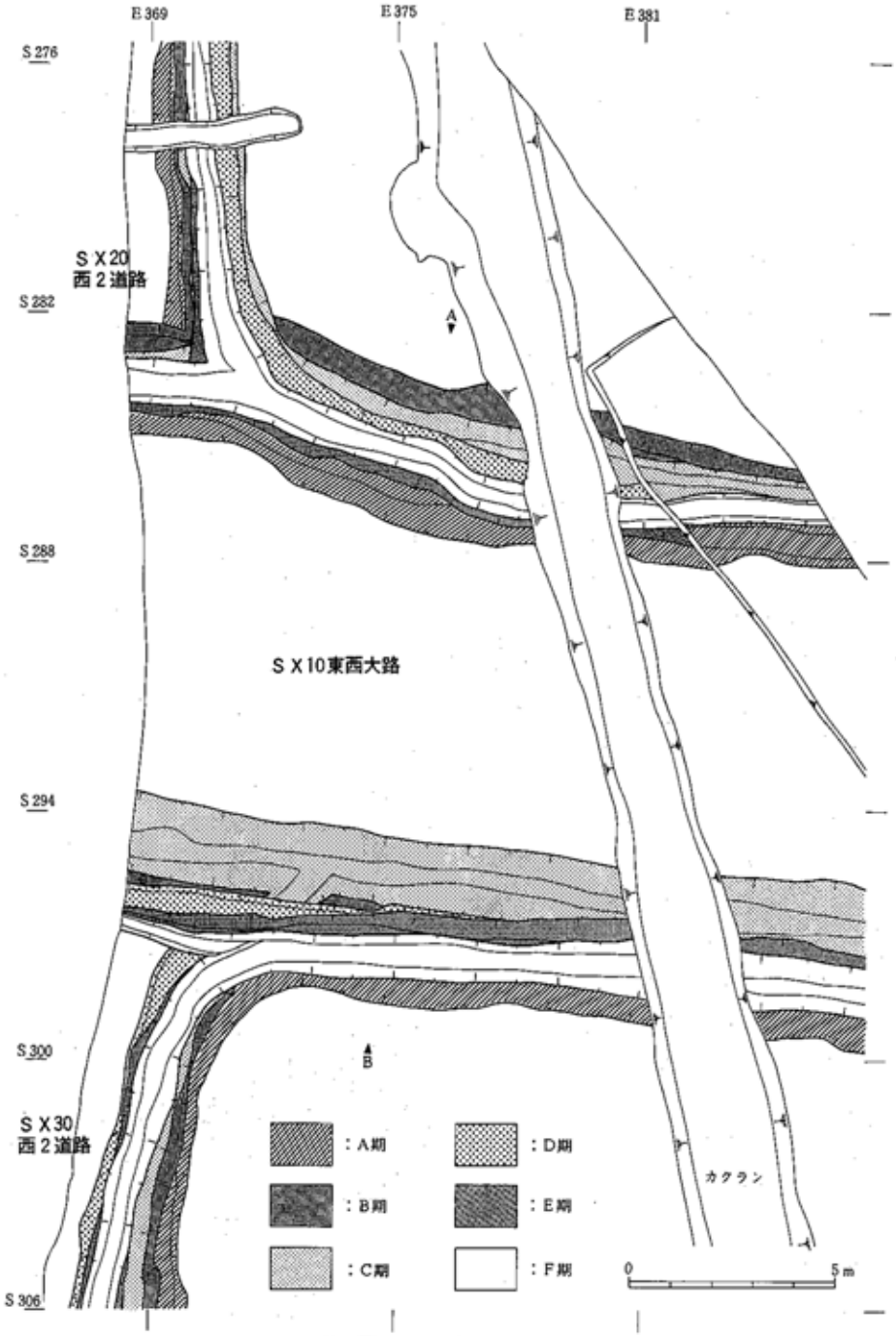
※　大路との距離は道路心々間の距離（路心間距離）で表している。また、南北道路の大路からの距離については、想定南北大路中心（政庁中軸線上）からの距離を示した。

※　「市○次」は多賀城市教委による山王遺跡の調査次数を、「宮多研37次」は多賀城跡調査研究所による「多賀城跡第37次調査」を示している。

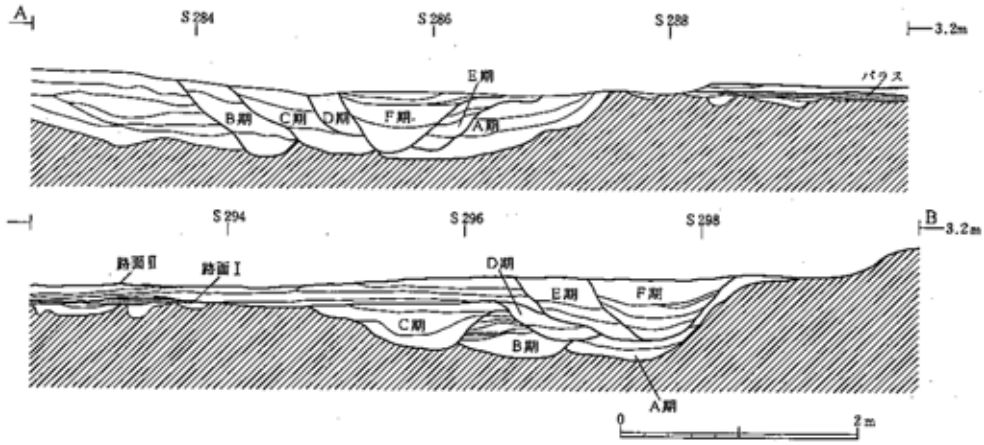
第１表　多賀前地区検出の道路跡

東西大路（ＳＸ10）　調査区北半部のⅦ層およびⅧ層上面で検出し、Ⅳ層に覆われる幅約 12mの東西道路跡である。南北両側に素掘り側溝をもつもので、西 2 道路（ＳＸ20・30）との交差点を挟んで約 40mにわたって検出し、今回は交差点の東約 20mについて精査した。多賀城市教育委員会によ

ＳＸ10東西大路



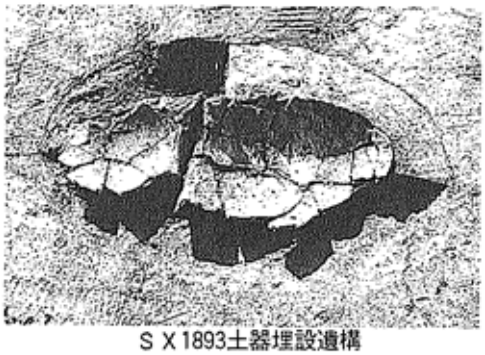
第２図　ＳＸ10東西大路平面図



第３図　ＳＸ10東西大路断面図

る山王遺跡東町浦地区の調査で検出された道路の延長で、両道路の側溝心々を結んだ道路の方向はＥ‐8°22’55”‐Ｓである。側溝にはＡ→Ｆ期の 6 時期の変遷があり、Ｃ期の側溝には灰白色火山灰の堆積が認められる。道路の標高は側溝の外側縁が約 3 mに対して、路面上が 2.6mであり、区画内部と路面との間には約 40ｃmの高低差がある。これは、道路造成の際に、意図的に路面を一段低く削り出したことによるものと思われる。路面Ⅰ（第 3 図）については、須恵器甕や瓦などの比較的大きな破片（バラス）を多く含む黒褐色土で、部分的な整地が施されている。またＤ期とＥ期の間には、厚さ 15～20ｃmの自然堆積層が路面を覆って堆積しており、大量の土砂を供給するような洪水等の自然災害があったものと推測される。なお、西 2 道路との交差については、東西大路の側溝が各期とも一貫してこれらの路面を貫いて、変形「Ｔ」形に接続している（註 3)。東西大路および西 2 道路の年代については、現在整理途中であり確定的なものではないが、側溝出土の遺物や灰白色火山灰との関係からみて 9 世紀代～10 世紀代を中心とした時期が想定される。ただし、今回は精査できなかったが、Ａ期以前にも側溝が 2～3 時期確認されており、8 世紀代にまで遡る可能性もある。

ところで、南 1 道路と西 1 道路の交差点で 2 基、南 2 道路と西 0ｂ道路の交差点で 2 基、**土器埋設遺構**を検出した。これらは土器を横位に埋設したもので、とくに後者は土師器甕 2 個を合口にした状態で埋設している。道路の路面上におけるこうした遺構は、これまでにも山王遺



ＳＸ1893土器埋設遺構

跡八幡地区や東町浦地区で合計 7 基見つかっており（第 2 表)、何らかの祭祀的な行為の結果を反映したものと思われる。

	位	置	土器の種類と数	出土状況	内容物	年代	備考
①	多賀前地区	南２道路・西０ｂ道路交差点	土師器甕２合口	横位	無	10C前半	前頁・写真
②	〃	南２道路・西０ｂ道路交差点	土師器甕２合口	横位	不明	10C前半	
③	〃	南１道路・西１道路交差点	土師器甕１	横位	無	10C前半	
④	〃	南１道路・西１道路交差点	土師器甕１	横位	無	10C前半	
⑤	八幡地区	北２道路・西４道路交差点	土師器高台付皿２合口	正位	無	10C前半	千葉:1992
⑥	〃	北２ａ道路・西５道路交差点	土師器甕１	横位	無	平安時代	佐藤・菅原:1991
⑦	〃	北２道路の路面上	土師器甕１	横位	無	平安時代	赤澤:1990
⑧	〃	北２道路の路面上	土師器甕２合口	横位	無	平安時代	赤澤:1990
⑨	〃	北２道路・西６道路交差点	土師器甕２合口	横位	無	10C前半	石川:1992
⑩	東町浦地区	東西大路・西９道路交差点	土師器甕１	横位	無	10C前半	相沢:1990
⑪	〃	東西大路・西９道路交差点	土師器甕１	横位	無	10C前半	相沢:1990

※ ⑤⑨⑩⑪は、報告書および多賀城市埋蔵文化財調査センターの石川俊英、千葉孝弥、相沢清利の諸氏の御教示による。

※ 内容物は、土器内の残存物の有無を示したものだが、1㎜の試験フルイを用いた肉眼観察によるものであり、残存脂肪等の分析は行っていない。

※ 年代については、①③④⑤⑨が灰白色火山灰との関係によるものであり、その他は土器の特徴による推定である。

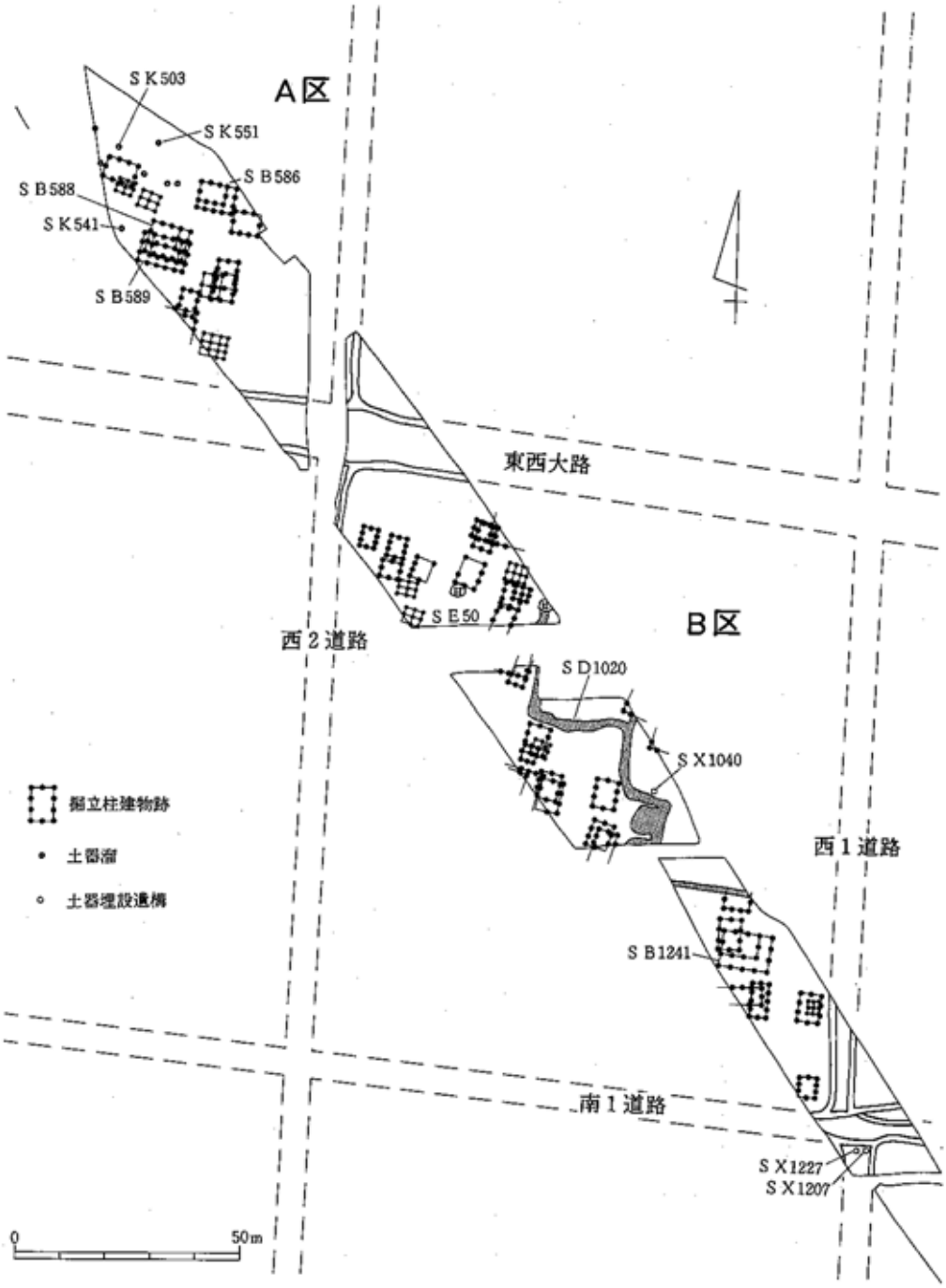
第２表　路上検出の土器埋設遺構

2．A区の遺構

南を東西大路に、東を西 2 道路に面した区画である。今回の調査区はA区の南東部にあたり、掘立柱建物跡、土器溜、溝跡、土壙など多数検出された。また、これらの遺構や堆積層などからは輸入陶磁器や多量の灰釉・緑釉陶器をはじめ、多種多様の遺物が出土した。

掘立柱建物跡は現在までに 13 棟検出され、いずれも東西方向の柱筋が東西大路とほぼ一致する。これらには、廂をもつ規模の大きい東西棟、桁行 3 間、梁行 2 間の小規模な建物跡、総柱建物跡が見られる。これらをみると廂をもつ建物跡を中心としてその周りに小規模な南北棟や東西棟、総柱建物跡が配置されていることがわかる。こうしたことからＡ区の南東部においては中心的な建物群と考えられる。廂をもつ建物跡は 3 棟検出されたが、そのうちＳＢ589 掘立柱建物跡は東・南・西側の 3 面に廂が付き、規模の大きい建物跡である。その他は 2 面に廂が付く建物跡である。また総柱建物跡には桁行 2 間、梁行 2 間のものの他に、桁行 3 間、梁行 3 間の規模の大きい建物跡も見られる。

調査区北西部で、土器溜が集中して 8 基検出された。これはこの区画内が土器を大量に消費する場であったことを示している。土器溜は平面形が径 1.0～2.0mの楕円形を呈するものが多く、10 世紀前半に降下したと考えられる灰白色火山灰の降下前後でそれぞれ数基ずつ確認されている。降下以前の土器溜は土師器を主体としたもので、須恵器も出土し


A区
SK503
SK551
SB586
SB588
SK541
SB589
東西大路
SE50
西2道路
B区
SD1020
SX1040
西1道路
SB1241
南1道路
SX1227
SX1207
掘立柱建物跡
土器溜
土器埋設遺構
0
50m

第4図　A・B区遺構略図

ＳＫ503土器溜（上部）

ＳＫ503土器溜（下部）

ている。降下以後は赤焼土器の出土量が増え、1 基からの土器の出土量も降下以前と比べて多くなる。これは降下以後になると土器の消費量が増えたことを示すと考えられる。ＳＫ503 からは赤焼土器を主体として 50 個体以上まとまって出土している。

Ａ区南東部では廂をもつ建物跡を中心とした建物群は南半部に見られ、土器溜は北西部に集中して見られる。建物群と土器溜群は重複が少なく、これは区画内における場の使い分け、すなわち生活する場と廃棄する場に分けられていたと考えられる。また前述したとおり、土器溜は灰白色火山灰降下前後に見られ、建物跡も土器溜と同様に灰白色火山灰降下前後に確認されている。Ａ区南東部は 10 世紀前半を中心とした遺構群と考えられる。

3．Ｂ区の遺構

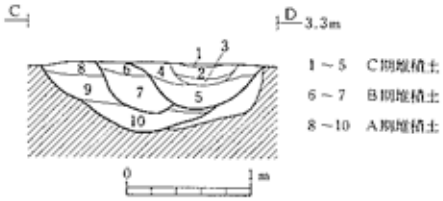
北を東西大路に、南を南 1 道路に、東を西 1 道路に、西を西 2 道路に面した東西約 135m、南北約 135mの区画である。区画のほぼ中央で庭園跡が検出され、その周りに建物跡が検出されていることから、この区画は一つの敷地として使われていたことがわかる。今回の調査は区画の北西から南東にわたっており、掘立柱建物跡、庭園跡、井戸跡、塀跡、土器埋設遺構、溝跡、土壙など多数検出された。庭園跡の周辺からは輸入陶磁器や多量の灰釉・緑釉陶器、また「守」の墨書土器も出土している。

庭園跡をなすと考えられる遺構は、遣水跡とみられるＳＤ1020 溝跡と貯水施設と考えられる土壙（ＳＫ1021）である。遣水はＢ区の中央を北西から南東へほぼ直角に折れ曲がりながら蛇行し、総長で 100mにわたって確認された。上幅は約 1.0～2.0mであるが、コーナー部分ではやや膨らむなど幅は一定していない。遣水は北から南に向かって流れていたと考えられる。ほぼ同位置で 3 時期（Ａ～Ｃ期）の変遷が認められ、Ｂ期の機能時に灰白色火山灰が降下している。貯水施設はＢ区の中央付近でＳＤ1020 に伴うもので、径

5.0～6.0mの不整楕円形を呈する。

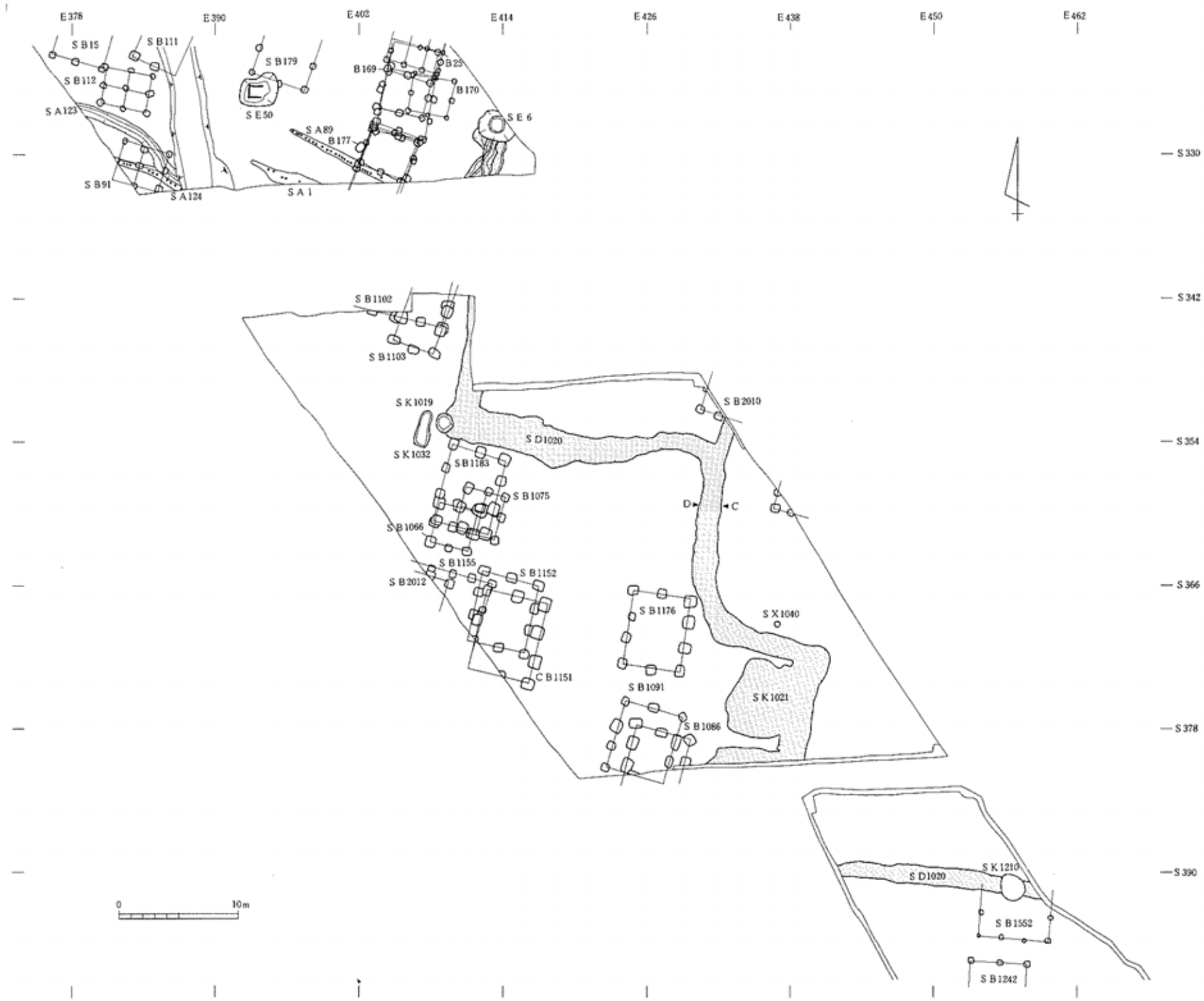
掘立柱建物跡は現在までに 41 棟検出され、いずれも東西方向の柱筋が東西大路とほぼ揃っている。廂をもつ東西棟や桁行 3 間、梁行 2 間の小規模な建物跡、総柱建物跡などがあり、小規模な建物跡には南北棟が多い。建物跡はおおよそ調査区の北西部、中央部、南東部の地域にまとまっている。中央部の建物群は柱穴が一辺 1.0m前後と規模の大きいのに対し、北西部の建物群は一辺 0.5m前後と小さい。建物群のうち南東部中央より検出されたＳＢ1241 掘立柱建物跡は、東・南側の 2 面に廂が付き、規模も大きいことから、Ｂ区南半部の中心的な建物跡と考えられる。北西部では桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟や桁行 2 間、梁行 2 間の建物跡、総柱建物跡が数時期にわたって確認されている。これらの建物跡はＢ区の中で庭園跡とほとんど重複しないで見られることから、庭園跡を中心として配置されていると考えられる。年代は、出土した遺物などから 9 世紀後半～10 世紀初頭を中心とする遺構群と考えられる。

庭園跡



第５図　ＳＤ1020溝跡断面図

Ｂ区では他に塀跡、井戸跡、土器埋設遺構が検出された。塀跡はＥ‐20°‐Ｓの方向で、ほぼ東西方向に延びるもので北西部で 5 条検出された。いずれも掘り方は溝状の布掘りで柱の多くは抜き取られている。井戸跡は北西部で 2 基検出された。そのうちＳＥ50 は井戸枠をもつもので、灰白色火山灰降下後に井戸枠が抜かれている。土器埋設遺構は中央部の遣水跡の近くで検出された（ＳＸ1040)。土師器甕を上向きにして埋めたものである。



第６図　庭園跡周辺平面図

4．C区の遺構

Ｂ区の南東部に接し、北を南１道路に、南を南２道路に、西を西１道路に、東を想定南北大路に面した東西約 125m、南北約 135mの区画である。今回の調査は区画の北西から南東にわたっており、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、塀跡、土器埋設遺構、小溝状遺構、溝跡、土壙などの多数の遺構が検出された。また南東端では河川跡を一部確認している。

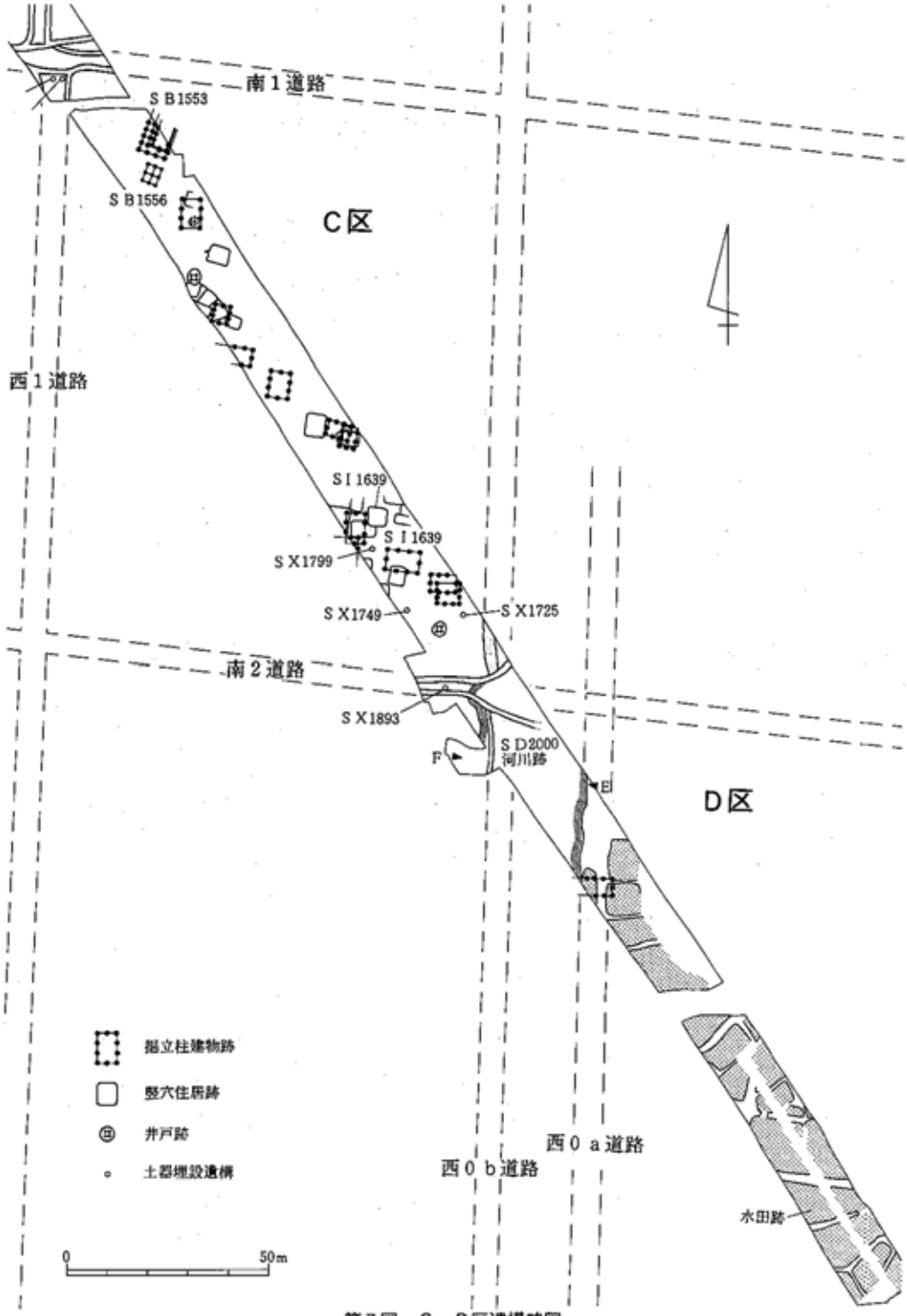
ＳＩ1635・1639竪穴住居跡

掘立柱建物跡は現在までに 19 棟検出された。建物の方向は多少のばらつきが認められるものの、おおよそ真北あるいは外郭南辺築地の方向とほぼ一致している。大半が桁行３間、梁行２間の小規模な東西・南北棟であるが、桁行２間、梁行２間の総柱建物も１棟検出されている。柱穴は一辺 0.6m前後の小規模なものが多い。

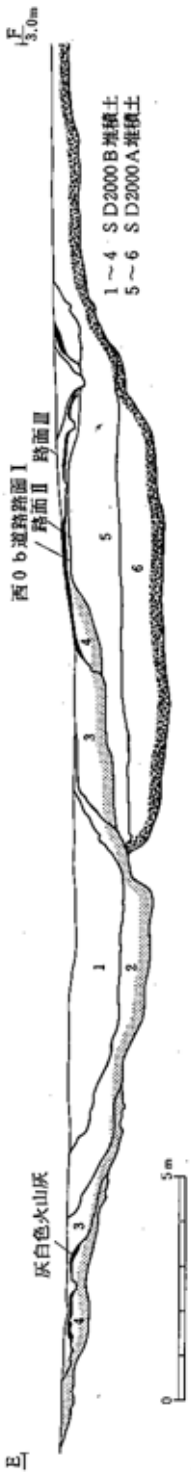
竪穴住居跡は 20 軒検出された。南半部に集中しており、ほぼ同位置で５軒重複するものもみられた。一辺が約 5mの正方形のものと 6m×4mもしくは 4m×3mの長方形のものがあり、後者が多い。方向は、掘立柱建物跡と同様におおよそ真北あるいは外郭南辺築地の方向とほぼ一致するものが多いが、重複関係において古いものの中にはこれらとは異なる方向のものもある。時期を特定できるような資料は少ないが、概ね奈良～平安時代前半頃のものと考えられる。なお、建物跡の中には竪穴住居跡と重複するものも認められるが、いずれの場合でも竪穴住居跡より新しい。

このほか調査区の南半部では、道路とほぼ方向を揃えた塀跡と溝跡が検出された。これらは、区画内をさらに細分するような施設と考えられる。敷地の規模や建物の構成、性格などを知る上で注目される。また、位置的には隔っているが、状況の酷似した土器埋設遺構が３基（ＳＸ1725・1749・1799）検出された。

このように、東西大路から南に奥まったＣ区でも道路跡とほぼ方向を揃えた遺構群が検出された。しかし、この区画内の建物が小規模であることに加えて、竪穴住居が混在していることなど、Ａ・Ｂ区とは異なる空間であったことは明らかである。具体的な性格は不明であるが、ここでは、Ａ・Ｂ区に比べ階層の低い人々の生活の場と考えておきたい。遺構の年代については、Ａ・Ｂ区と同様に 9 世紀代～10 世紀前半を中心とした時期であるが、8 世紀後半まで遡る遺構も検出されており、この周辺は方格地割がなされる以前から、利


南１道路
ＳＢ1553
ＳＢ1556
Ｃ区
西１道路
ＳＩ1639
ＳＩ1639
ＳＸ1799
ＳＸ1749
ＳＸ1725
南２道路
ＳＸ1893
ＳＤ2000
河川跡
F
E
Ｄ区
掘立柱建物跡
竪穴住居跡
井戸跡
土器埋設遺構
0
50m
西０ａ道路
西０ｂ道路
水田跡

第７図　Ｃ・Ｄ区遺構略図



第８図　ＳＸ1850西０ｂ道路・ＳＤ2000河川跡断面図

用されていた可能性が高い。

5．Ｄ区の遺構

Ｄ区はＣ区の南東部に接し、北を南２道路に、西を西０ａ・０ｂ道路と河川跡によって画された地域で、ほぼ全域で水田跡が検出されている。他に掘立柱建物跡 1 棟、溝跡、土壙なども検出された。

水田跡は、灰白色火山灰降下以前のもので、多いところで４時期（Ａ→Ｄ期）確認された。後世の耕作などにより不明な点もあるが、今回の調査ではＣ期ないしＤ期の水田区画を 18 枚検出した。その形態は、西０ａ道路に沿った部分では正方形や長方形を呈し、方向も揃えているが、他の部分では不整形を呈するものが多く、方向も一定しない。面積が推定可能なものは３枚あり、それぞれ約 74 ㎡、約 70 ㎡、約 66 ㎡である。年代は、耕作土中からロクロ調整土師器や須恵器の破片が出土し、また灰白色火山灰に覆われていることから、９世紀代～10 世紀前半頃を中心とした時期が考えられる。下層の古いＡ・Ｂ期の年代は不明である。なお、今回検出した水田は西０ａ道路の路面上の一部にもおよんでいるが、他の時期では西０ａ道路との先後関係を明らかにすることはできなかった。

河川跡は、砂押川の旧河道と考えられるもので、河道の移動に伴う 2 時期の変遷（ＳＤ2000Ａ→ＳＤ2000Ｂ）が捉えられた。ＳＤ2000Ａは西０ａ道路の西側を南流する。上幅は不明であるが、下幅約 9m、深さ約 2.2mで、底面は現砂押川の底面（標高約 2m）よりもかなり低い。西０ｂ道路および南２道路は、この河川の堆積土上につくられている。ＳＤ2000ＢはＳＤ2000Ａの河道が東側に移動し、形成された河川である。西０ａ道路はこれによって壊され、また西０ｂ道路の東端はこの河川によって限られる。上幅約 19m、下幅 6.7～7.2m、深さ約 2.1mで、底面はＳＤ2000Ａと同様に、現砂押川の底面より低い。河川の年代は概ね奈良～平安時代前半頃と考えられるが、河道の移動後の比較的早い時期に灰白色火山灰の堆積が認められることから、ＳＤ2000Ｂは 10 世紀代以降のものと思われる。

このほか水田跡の下からも掘立柱建物跡や土壙などが検出されているが、その密度はＡ・Ｂ・Ｃ区と比べてきわめて低い。なお、Ｄ区は南に向かって標高が徐々に低くなっており、水田跡は調査区外にもさらに広がっているものと予想される。このことから、少なくとも平安時代には、Ｄ区以南の低地部分はおもに水田地域として利用されていたものと考えられる。

（3）遺物

1．輸入陶磁器

今回出土した輸入陶磁器には青磁（5 片）、白磁（9 片）、黄釉（4 片）がある。

青磁は碗および合子の蓋とみられる破片資料で、越州窯系のものである。

白磁には玉壁高台で玉縁をもつ碗と、口縁端部が外反気味に立ち上がる皿の破片資料があるが、いずれも邢窯系のものとみられる。

黄釉は長沙窯系の黄釉褐彩貼花文水注で、破片はすべて同一個体のものとみられる。胎土は灰白色を呈し、化粧土が顕著に認められる。把手下端の肩部には葡萄文のメダリオンが貼り付けられ、その上からは鉄釉が施されている。

これらの年代については、9 世紀前半～10 世紀初頭頃に属するとみられる（註 4）。

2．施釉陶器

施釉陶器には灰釉陶器（約 500 片）、緑釉陶器（約 200 片）がある。これらは、土師器・須恵器・赤焼土器の量に比べると 1%にも満たないものの、東日本においては特筆すべき量といえる。

灰釉陶器には椀、皿、段皿、耳皿、瓶、壷、蓋などがあり、椀・皿の類が主体をなす。猿投窯編年による黒笹 14 号窯式と黒笹 90 号窯式に比定され、年代的には 9 世紀前葉～末頃とみられる（斉藤：1989，前川：1989）。量的には黒笹 14 号窯式のものが多く、その中でもとくに新しい段階のものが目立つ（註 5）。

緑釉陶器には椀、稜椀、皿、段皿、盤、耳皿、瓶、水注などがあり、灰釉陶器と同様に椀・皿の類が主体を占める。9 世紀前葉～中葉には京都産（洛北）が圧倒的に多く、一部東海産（猿投・黒笹 14 号窯式）も含まれる。9 世紀後半～10 世紀初頭には京都産（洛西）もみられるものの東海産（猿投・黒笹 90 号窯式）が多く、10 世紀代にはこれに東海産（東濃）と近江産が若干加わるといった全体的な傾向が認められる（註 5）。なお、これらの中には陰刻花文が施される東海産の椀・皿類（4 片）や、緑彩を施した京都産の椀もしくは皿の類（1 片）もある。

3．土器

土師器、須恵器、赤焼土器が多量に出土した。

土師器には坏・高台付坏・甕・皿・高台付皿・耳皿・蓋・鉢・甑・羽釜などがあるが、量的には坏および甕が大半を占める。ロクロ調整のものが主体をなし、坏の切り離しは回転糸切り無調整のものが多い。

須恵器には坏・高台付坏・高坏・双耳坏・稜椀・甕・壷・瓶・双耳瓶・盤・蓋・鉢などがある。量的には坏が大半を占め、回転糸切り無調整のものが多い。

赤焼土器には坏・高台付坏・高台付皿・小皿・三足付皿・耳皿があるが、その大半が坏類であり、小皿以下の他の器種は量的に少ない。

なお、土器の中には墨書のあるものが相当量あり、土器溜や井戸跡、河川跡などから、合計 200 点を越える墨書土器が出土した。とくにＳＤ2000 河川跡からの出土が目立つ。土師器・須恵器に墨書されたものがほとんどであるが、赤焼土器や灰釉陶器もみられる。大半が坏で、墨書はほとんどが体部・底部の外面になされている。内容は文字、記号、絵などがある。注目される文字としてはＢ区の庭園跡付近から「守」、Ｃ区のＳＥ1606 井戸跡から「西曹司」がある。「守」は須恵器の坏の底部に書かれ、国司の『守』を意味する可能性もある。「西曹司」は土師器の坏の体部を巡るように書かれており、前後に文字のつづくことも考えられる。そのほか文字には「宇多□□」（東丸カ）、「丸子」などの人名をはじめ「定」、「上」、「富」、「善」、「藤」、「本」、「村」、「合」、「得」、「史」などがある。また記号には「◎」、「#」、「＋」などがあり、絵には人面を描いたとみられるものもある。

これらの土器群の年代については現在整理中であり確定的なものではないが、概観したところでは 8 世紀後半～10 世紀代に位置付けられ、中でも 9 世紀代以降のものが主体をなしている。

4．硯

硯は小破片が多く、全体の形や大きさのわかるものは少ないが、円面硯や風字硯をはじめ、二面硯、転用硯などが出土している。

5．瓦

軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が出土しているが、いずれも小破片であり量的にも少ない。

6．木製品

鍬、曲物・蓋・底板、椀、櫛、斎串、人形などがあり、おもに道路側溝や井戸跡、河川跡などから出土した。とくにＳＤ2000 河川跡からは斎串や人形といった祭祀具をはじめ、曲物、椀など多岐にわたる木製品が出土した。人形（図版 13-4）は、扁平な板材を用いて人の正面全体を表現したもので、全長約 103ｃｍを測り、この類のものとしては超大型品といえる。頭頂を平らにし、頸部には撫で肩になるような切欠きをいれ、さらに腰部や爪先まで表現しているが、墨描は認められない。幅 5.0～9.0ｃｍ、厚さ 0.5～0.9ｃｍである。

7．鉄・銅製品

鉄製品には刀子・鎌・鏃・馬具・紡錘車・釘などがある。鎌は曲刃で、基部が直角に折曲げられている。鏃には雁股式のものがある。馬具は蛇腹巻きにした轡の左引手部分が出土している。銅製品には鏡・獣脚がある。鏡は長さ 4.5ｃｍほどの小破片だが縁部分から八花鏡と考えられる。縁の断面は蒲鉾式を呈し、鏡背に文様も認められるが詳細は明らかでない。

8．土・石製品

土製品としては、土錘・鞴の羽口などが出土している。石製品には石帯の鉈尾・砥石・紡錘車・陽物・滑石製の管玉などがある。石帯の鉈尾は縦 4.4ｃｍ、横 6.2ｃｍ、厚さ 0.8ｃｍほどで、裏面に 2 個一対の円形の止め孔が三方にある。石材は不明だが、黒色を呈している。

9．その他の遺物

以上のほか漆器、漆紙文書、骨製品、鉄滓、ウマ・ウシ・シカ・イヌなどの骨がある。漆紙文書は 3 点出土したが判読できたのは 1 点で、「者」1 文字が判読された。骨製品としては、卜骨（図版 13-10）がＳＤ2000 河川跡から出土した。ウマもしくはウシの肋骨を板状に半截し、髄質部側を薄く平坦に削って、一辺 5mm前後の方形の鑽を一列に彫り、その内部底面に焼灼を加えたものである。そのほとんどが径 2～3 mmの円形状に焼け抜けている。両端部とも破損しており、全体の大きさや灼痕の数等については不明である。残存長 6.0ｃｍ、幅 2.3ｃｍ、厚さ 0.2ｃｍである。

註 1　ただし、八幡および伏石地区において、北 2 道路の約 30m北で見つかっている北 2ａ道路は、他の道路と共存する時期があるものの、道路の間隔が極端に狭いことや他の道路に先行して存在すること、また灰白色火山灰の降下後は廃絶していることなど、他とは規格の異なる道路と考えられている（佐藤・菅原：1991）。一方、西 7 道路と西 9 道路の間は未調査であり、道路は検出されていないが、その間隔は約 230mあり、両者の間に道路 1 条（西 8 道路）の存在が想定される。

註 2　西 0ａ・ｂ道路とした新旧時期の異なる 2 条（西 0ａ→西 0ｂ）の南北道路については、方向や他の道路との間隔等からみて想定南北大路の延長と考えられるが、路幅や東西大路以北の状況が明らかでない現段階においては、西 0 道路と位置付けておく。

註 3　西 2 道路（ＳＸ20・30）の方向については、多賀城跡調査研究所が第 37 次調査で検出したＳＸ1240 道路遺構の東側溝（ＳＤ1241）の心々を結んだ線で測定した結果、ほぼ真北方向を示し、政庁中軸線の方向とほぼ一致することが明らかになった。

註 4　輸入陶磁器については、専修大学亀井明徳氏、国立歴史民俗博物館小野正敏氏、太宰府市教育委員会山本信夫氏、京都市埋蔵文化財研究所百瀬正恒氏・中村敦氏の御教示による。

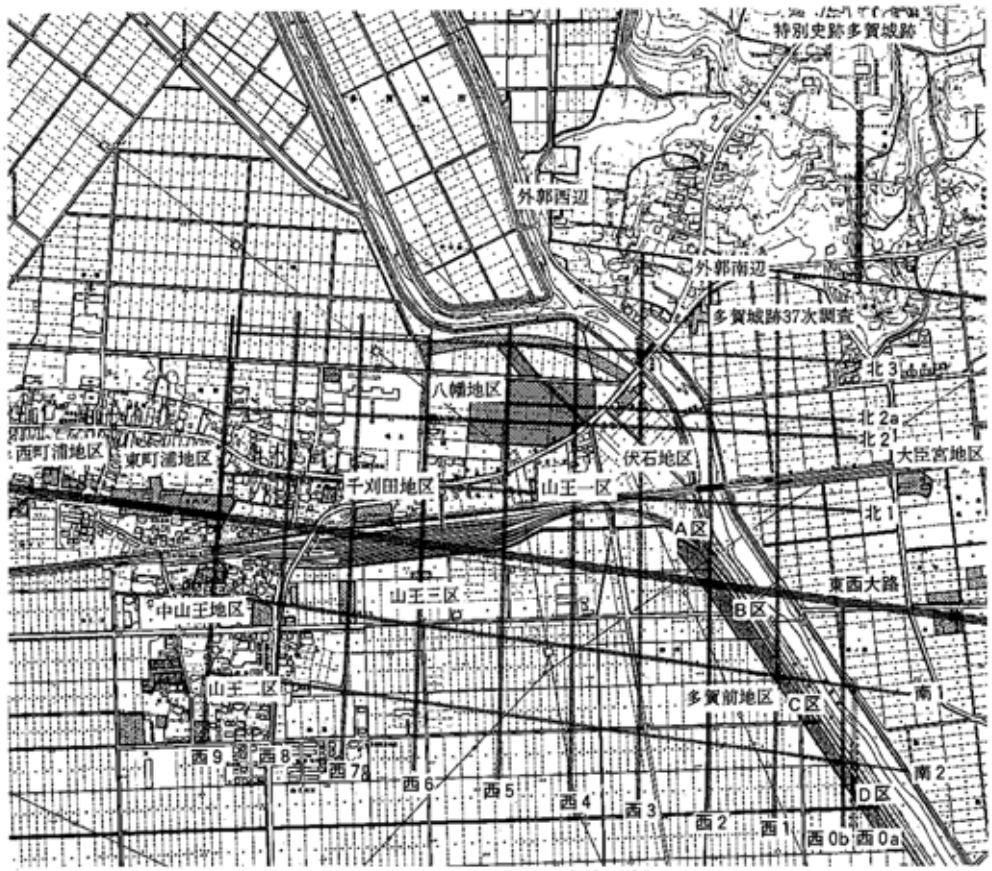
註 5　灰釉陶器および緑釉陶器については、名古屋学院大学楢崎彰一氏、愛知県陶磁資料館井上喜久男氏、京都市埋蔵文化財研究所百瀬正恒氏・中村敦氏、富山大学前川要氏、国立歴史民族博物館高橋照彦氏の御教示による。

Ⅴ　調査の成果

今回の調査では、東西道路跡 3 条、南北道路跡 3 条、庭園跡 1、掘立柱建物跡 74 棟以上、竪穴住居跡 20 軒、井戸跡 7 基、土器溜 8 基、土器埋設遺構 8 基のほか、塀跡、水田跡、小溝状遺構、溝跡、土壙、河川跡、柱穴など多数の遺構を検出した。そしてこれらの遺構や堆積層などからは輸入陶磁器や施釉陶器をはじめ多量の土器や瓦、木製品、鉄・銅製品、土製品、石製品、骨角製品、動植物遺体などの多種多様の遺物が出土した。また、漆紙文書や多量の墨書土器も出土した。

これらの中で、今回の調査の成果として特筆されることは、古代陸奥国府多賀城の城外において東西・南北道路による方格地割の存在が確定的になったことと、地割された区画内部の利用状況についても部分的にではあるが明らかになったことである。以下では、これまでの調査の成果も踏まえ、おもにこれらの点について述べていくことにする。

（1）多賀城の城外における方格地割



第９図　多賀城周辺の方格地割

1．多賀前地区検出の道路跡

今回の調査を行った多賀前地区は、多賀城政庁の南西約１ｋｍに位置し、多賀城周辺におけるこれまでの調査により東西および南北道路の存在が想定され、方格地割がおよんでいたと推定されていた地域である。とくに、幅約 12mの東西大路の推定ライン上にあたる。今回の調査では、この東西大路の延長をはじめ、南１道路、南２道路、西０ａ・０ｂ道路、西１道路、西２道路を検出した。

ＳＸ10 東西大路は、本地区の約 900m西の山王遺跡東町浦地区（相沢：1990）で約 190mにわたって検出されている東西道路跡の延長である。路幅はＳＸ10 が側溝心々で 11～12m、東町浦地区が 13～15mを測る。両者の路心座標による方向はＥ‐8°22'55”‐Ｓで、多賀城外郭南辺築地の方向（Ｅ‐7～8°‐Ｓ）とほぼ一致する。築地との距離は約 540mである。

ＳＸ20・30 西２道路は、本地区の約 470m北の市川字館前地区の調査（多賀城跡第 37 次調査、白鳥：1981）で検出されているＳＸ1240 南北道路跡の延長である。西２道路は、今回東側溝を検出したにすぎず詳細は明らかでないが、両者の東側溝心々座標による方向はＮ‐0°49'23”‐Ｅでほぼ真北、すなわち多賀城政庁中軸線（Ｎ‐1°04'00”‐Ｅ）とほぼ一致する。路幅はＳＸ1240 でみると側溝心々で約 7mであり、政庁中軸線の延長上（想定南北大路の道路心々）との路心間距離は約 260mである。

ＳＸ1850・1950 西０ａ・０ｂ道路は、いずれもほぼ真北方向に延びる時期の異なる南北道路跡で、想定南北大路の延長上にあたる。東側で検出された先行する西０ａ道路は、ＳＤ2000 河川跡の河道の移動（西：ＳＤ2000Ａ→東：ＳＤ2000Ｂ）に伴いＳＤ2000Ｂに壊されており、路幅や他の道路との接続等は不明である。またＳＤ2000Ａの堆積土上につくられた西側に位置する後続の西０ｂ道路は、東限がＳＤ2000Ｂになっていると考えられ、路幅は 5m以上である。西０ａ道路については、西０ｂ道路と時期的に連続し、他の道路と同様の計画でつくられた一連の道路の可能性がある一方で、側溝をもたない盛土による道路であることなど他の道路との構造的な違いも認められ、性格や時期の異なる道路の可能性も指摘でき、なお検討を要する。

このほか南１道路、南２道路、西１道路を検出した。上記の道路と同様に、東西道路が多賀城外郭南辺築地の方向とほぼ一致し、南北道路がおおよそ真北を示している。また、各道路の路心間距離は、東西・南北とも約 125～135mとほぼ一定している。

2．道路の年代

これまで、道路の年代については、いずれの道路も側溝に 2～4 時期の変遷があり、古い方から 2～3 番目の側溝や路面堆積土に灰白色火山灰の堆積が認められることや、最も

古い時期の側溝出土の遺物がロクロ調整土師器を主体としていることなどから、おおよそ 9 世紀代～10 世紀前半頃に位置付けてきた（相沢：1990、菅原：1992）。また、八幡地区で検出されたこれらに先行する北 2ａ道路についても、奈良時代までは遡らないものと推定した（菅原：1992）。一方、今回調査した東西大路と西 2 道路は、6 時期（Ａ→Ｆ期）の変遷が捉えられ、Ｃ期の側溝には灰白色火山灰の堆積が認められた。年代については、Ｃ期以前の側溝出土の土師器はロクロ調整を主体とし、またＣ期以後の側溝および路面堆積土では赤焼土器の比率が高いことなど、これまでに検出されている他の道路と同様に、9 世紀代～10 世紀代を中心とした時期が想定される。ただし、今回は精査できなかったが、Ａ期以前にも側溝が 2～3 時期確認されており、8 世紀代にまで遡る可能性もある。

3．方格地割の復元

ここで、これまでの調査成果を踏まえ、多賀城の南西部における方格地割の復元を試みる。ただし、東西大路、北 2 道路、西 2 道路のように、比較的長い距離あるいは距離を隔ててその延長が検出できたものを除き、大部分のものは狭い範囲での点的な調査にとどまるため、詳細な方向や各道路間の距離については必ずしも確定的なものではない。

南北道路は、政庁中軸線（想定南北大路）を起点に、約 1.1ｋｍ西の東町浦地区まで 9 条が検出されている。いずれも真北方向を示し、政庁中軸線の方向とも、ほぼ一致している。各道路の路心間距離はおおよそ 110～135mであり、約 230mある西 7 道路と西 9 道路の間にも、今のところ検出されていないが、西 8 道路が想定される。

東西道路は、東西大路を挟んだ北と南で基準とする方向が異なっており、北側が真北とほぼ直交する方向を、南側では多賀城外郭南辺築地の方向を基準にしている。各道路の路心間距離は、他の道路に先行してつくられた計画の異なる北 2ａ道路を除くと、北 1 道路以北が 115～135m、東西大路以南が約 135mである。なお、南北方向の地割については、今回の調査により東西大路を起点に、これと方向を揃えた道路が約 270m南まで 2 条検出されたことで、多賀城外郭南辺の約 810m南までおよんでいたことが明らかになった。

このように多賀城の南西部には、少なくとも政庁中軸線から西に約 1.1ｋｍ、外郭南辺築地から南に約 810mの範囲に、多賀城を意識した一定の計画性にもとづく方格地割が、9 世紀代～10 世紀代を中心とした時期に施行されていたことが明らかになった。ただし、上記のとおり、東西と南北、さらには東西大路の北と南で地割の基準とする方向が異なることや、場所によって路心間距離にばらつきが認められることなど、未解決な部分もある。

ところで、多賀城の南東部でも、多賀城廃寺や「国司の館」と推定されている館前遺跡（高倉：1980）、市川橋遺跡大臣宮地区（高倉他：1984）などの多賀城と密接な関わりをもつ遺跡が知られている。また、市川橋遺跡高平地区（高野：1974、高倉・滝口・相沢：1985、

石川：1990)、水入地区（森：1982、高倉他：1984、滝口：1990）などでも、多賀城との強い関連性を示すような遺構・遺物が多数検出されているが、方格地割の実態は今のところ明らかではない。同様に、北 3 道路以北についても明らかではなく、多賀城外郭西門と方格道路の関係などは今後の課題である。

一方、西 9 道路の西側に位置する山王遺跡西町浦地区や新田遺跡北寿福寺地区（千葉：1990)、南寿福寺地区、後地区、また南 2 道路の南側に位置する山王遺跡山王二区（石本・相沢：1986）でも、多賀城との強い関連性を示すような遺構・遺物が多数検出されている。とくに、西町浦地区や北寿福寺地区では東西大路の延長と考えられる東西道路が検出されており、西 9 道路以西にも多賀城と密接な関わりをもつ地域が広がっていたことが明らかになっている。が、これらの地域と方格地割の関係や利用状況および性格的な位置付けについては不明な点が多く、方格地割内の性格や方格地割と国府域の関係を知る上においても、今後明らかにしていかなければならない課題の一つといえる。

(2) 区画内部の利用状況

今回の調査区は、東西大路を挟んで区画の対角線上に隣接する北側の 1 区画（A区）と南側の 2 区画（B・C区)、そしてさらに南で方格地割の外側地域（D区）にあたっている。ここでは、東西および南北道路によって区画された敷地内部の利用状況をまとめ、それぞれの区画の性格についても簡単に触れておく。

1. A区

東西大路の北側に面し、他の三辺を真北およびこれと直交する方向に揃えた台形状の区画である。廂付東西棟建物や小規模な南北棟建物、総柱建物が、いずれも東西大路とほぼ方向を揃えて配置され、周辺からは輸入陶磁器や多量の灰釉陶器・緑釉陶器が出土した。今回の調査では区画の南東部の約 1/4 を検出したのみであり、それぞれの建物群の構成や領有する敷地の規模などは明確ではないが、東西大路に面していることや検出された遺構の規模、遺物の質からみて、国司クラスの館である可能性が高い。なお、調査区北端の遺構が希薄な部分には土器溜が集中する傾向が認められた。このことは、この敷地内で多量の土器を一度に使用・廃棄するような行為が行われたことを示唆するとともに、今後、敷地内の構成や配置を考える上で大きな手がかりになるものと思われる。

2. B区

東西大路の南側に面し、東西両辺を真北方向に、南北両辺を外郭南辺築地に方向を揃えた平行四辺形状の区画である。路心間距離で東西約 135m、南北約 135mを測る。区画のほぼ中央部を庭園が占地し、これをとり囲むように廂付東西棟建物や小規模な南北棟建物、総柱建物が計画的に配置されているとみられる。今のところ主屋に相当する建物は検出さ

れておらず、敷地内の構成も明らかではないが、区画をさらに細分するような溝や塀などの施設は認められないことから、この敷地はＢ区全体を領有する大規模なものであったと考えられる。また、庭園を中心とした付近からは輸入陶磁器や多量の灰釉陶器・緑釉陶器が出土しており、この区画が国司の中でも、長官にあたる「守」の館であった可能性が考えられる。

3．C区

Ｂ区の南東部に接した方格地割南端部の区画である。Ｂ区と同様に平行四辺形状を呈し、路心間距離で東西約 125m、南北約 135mの規模をもつ。区画のほぼ全域で、真北あるいは外郭南辺築地に方向を揃えた小規模な建物や竪穴住居が多数検出されている。東西大路から奥まった区画であることや遺構の構成からみて、Ａ・Ｂ区とは階層や性格の異なる区画であると考えられる。ここでは、Ａ・Ｂ区に比べて階層の低い人々の生活の場と考えておきたい。

4．D区

方格地割の南外側にあたる。南へと延びる西０ａ・０ｂ道路と河川、およびこれらに沿って水田が検出された。Ｄ区は南に向かって徐々に標高が低くなっており、この周辺地域はおもに水田として利用されていたことが明らかになった。

ところで、方格地割内部の調査はこれまでにも行われており、東西大路の北側に面し、北１・西６・西７道路に囲まれた千刈田地区では「国守の館」の存在が明らかになっている（石川・相沢：1991）。また、これに隣接する西側の区画でも 5×2 間と規模の大きい東西棟建物が検出されており（高倉・石川・千葉：1986）、これら東西大路に面した方格地割内部の区画は、国司クラスの上級官人の館が建ち並ぶような官舎街であったと推定される。一方、北１道路以北の八幡地区では、Ｃ区と同様、小規模な建物によって構成される区画が明らかになっており（赤澤：1990、佐藤・菅原：1991、菅原 1992、千葉：1991、1992）、東西大路から奥まった区画は、大路に面した区画を領有する国司クラスの官人に比べ階層の低い人々の生活の場として位置付けられていたものと想定される。

（3）祭祀に関わる遺構・遺物について

祭祀に関わる遺構としては土器埋設遺構があり、今回の調査では８基検出された。これらには、埋設された場所や土器の検出状況からみて、2 通りのものがある。一つは、道路の交差点付近に、土師器甕１個ないし２個合口のものを横位に埋設したもので、今回４基検出された。同様のものは、これまでにも 7 基の検出例がある（第 2 表）。いずれも甕内には何ら内容物が残存せず、その具体的な性格については今後の課題である。しかし、道路上に限って検出されることから、単純に甕棺墓として捉えるわけにはいかず、道路や区画

（敷地）内の地鎮、あるいは道路上での祭祀的な行為の結果を反映したものと推測される。なお、年代が明らかなものは、すべて 10 世紀前半以降（灰白色火山灰の降下以降）に位置付けられ、また時期的な共通性も認められることから、何らかの画期に伴うような祭祀であった可能性も考えられる。

もう一つは、土師器甕を正位にして埋設したもので、Ｂ区区画内で 1 基（ＳＸ1040）、Ｃ区区画内で 3 基（ＳＸ1725・1749・1799）検出された。このうちＣ区の 3 基は、それぞれ離れた位置で検出されているが、土器の形態や大きさ、調整が同様で、時期、性格とも一連のものと思われる。他の遺構との直接的な関係は認められず、また甕内にも何ら内容物が残存していないことから、現時点でこれらの具体的な性格を特定することはできないが、敷地内や建物全体に関わるような地鎮の可能性が考えられる。また、Ｂ区の 1 基についても、同様の性格のものと思われる。

祭祀に関わる遺物としては斎串や人形、卜骨などがある。これらの多くは奈良～平安時代前半頃の砂押川と考えられる河川（ＳＸ2000）の堆積土中から、墨書土器を含む多量の土器や木製品、鉄・銅製品、動植物遺体などとともに出土した。とくに人形は、全長が 1 mを越す超大型品で、多賀城周辺では初めての出土である。一般的には、罪穢や悪気をこれに移し、流れに投げ捨てる祓、すなわち古代都城における大祓や七瀬祓といった律令的祭祀に、斎串や鳥形などの木製模造品や人面墨書土器などの祭祀遺物とともに使用されたと考えられている（奈良国立文化財研究所：1984）。兵庫県姫谷遺跡（但馬国の推定国府域）や静岡県伊場遺跡（遠江国布智郡衙の一部）、山形県俵田遺跡（城輪柵の推定国府域）などの地方官衙周辺地域においても、その出土例が知られており、地方行政機関の周辺にも京と同じ構造をもつ祓所が設定された可能性が指摘されている（金子：1985）。今回の出土状況をもって、これら祭祀遺物の用途や意味などについて論じることはできないが、砂押川からは、これまでにも人面墨書土器が採集されており（加藤：1971）、この河川が陸奥国府における祓いの場となっていた可能性も指摘できる。

祭祀に関わる遺構や遺物については、性格や用途など不明な点が多く、今後の資料の増加に期するところが大きいが、今回のこれらの発見は古代地方都市における祭祀を考える上で貴重な資料といえよう。

引用参考文献

相沢清利（1990）;「山王遺跡－第 8 次発掘調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第 22 集　多賀城市教育委員会

赤澤靖章（1990）;「山王遺跡－仙塩道路建設関係遺跡八幡地区調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第 138 集　宮城県教育委員会

石川俊英（1990）;「市川橋遺跡調査報告書－平成元年度発掘調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第 21 集　多賀城市教育委員会

石川俊英（1992）;「山王遺跡第 15 次調査」『多賀城市文化財調査報告書』第 29 集　多賀城市教育委員会

石川俊英・相沢清利（1991）;「山王遺跡－第 9 次発掘調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第 24 集　多賀城市教育委員会

石本敬・相沢清利（1986）;「山王遺跡－昭和 60 年度発掘調査報告書Ⅰ」『多賀城市文化財調査報告書』第 9 集　多賀城市教育委員会

加藤孝（1971）;「人面墨描土師器考」『東北学院大学東北文化研究所紀要』第 3 号

金子裕之（1985）;「平城京と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 7 集

白鳥良一（1981）;「第 37 次発掘調査－多賀城跡－」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1980

佐藤則之・菅原弘樹（1991）;「山王遺跡－仙塩道路建設関係遺跡平成 2 年度発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第 141 集　宮城県教育委員会

菅原弘樹（1992）;「山王遺跡－仙塩道路建設関係遺跡平成 3 年度発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第 147 集　宮城県教育委員会

高倉敏明（1980）;「館前遺跡－昭和 54 年度発掘調査報告」『多賀城市文化財調査報告書』第 1 集　多賀城市教育委員会

高倉敏明（1981）;「山王道跡－山王・高崎遺跡発掘調査概報」『多賀城市文化財調査報告書』第 2 集　多賀城市教育委員会

高倉敏明他（1984）;「市川橋遺跡調査報告書－昭和 58 年度発掘調査報告書」第 5 集　多賀城市教育委員会

高倉敏明・滝口卓・相沢清利（1985）;「市川橋遺跡－昭和 59 年度発掘調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第 8 集

高倉敏明・石川俊英・千葉孝弥（1986）;「山王遺跡－昭和 60 年度発掘調査報告書Ⅱ」『多賀城市文化財調査報告書』第 10 集

多賀城市史編纂委員会（1991）;『多賀城市史－第 4 巻考古資料』

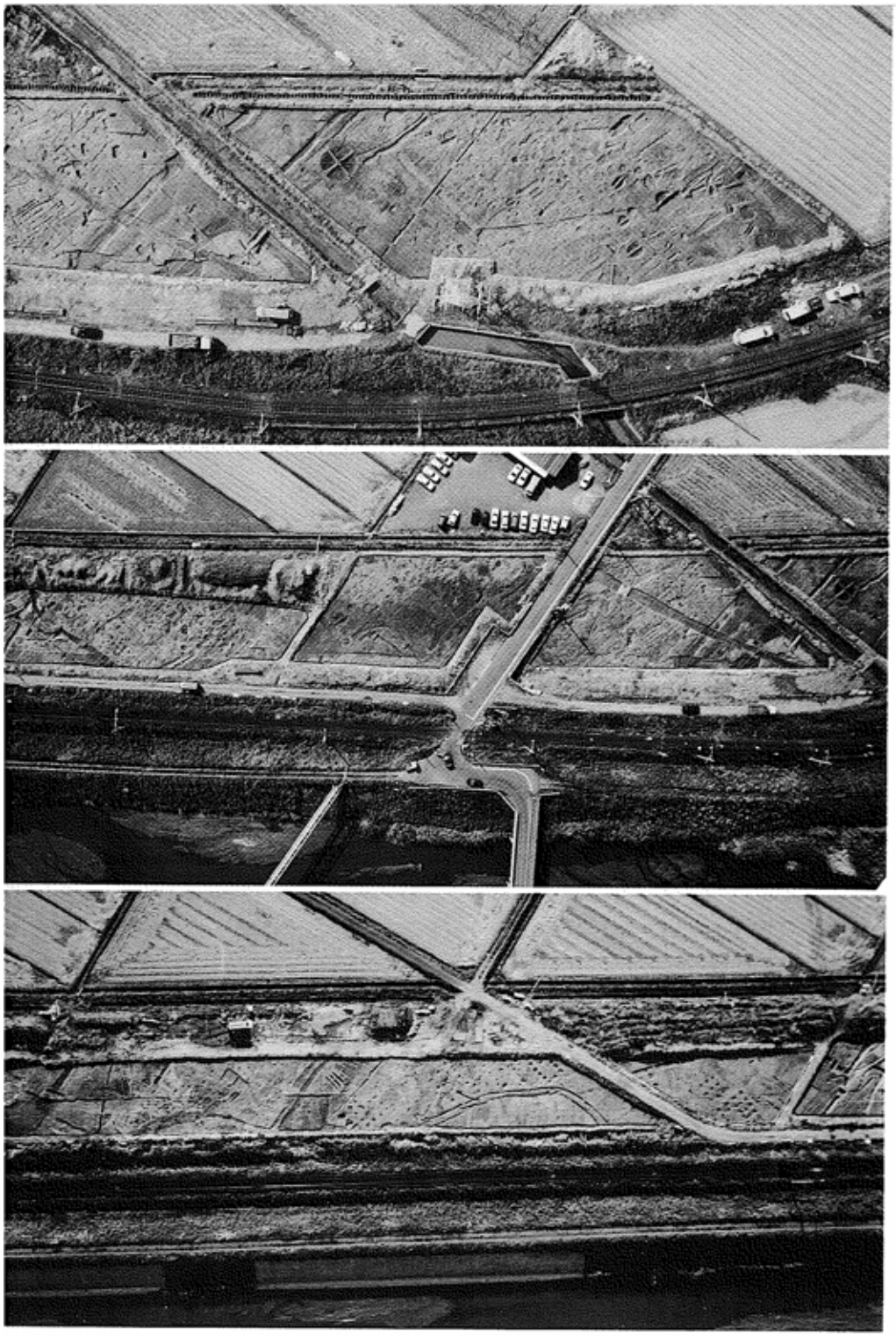
高野芳弘（1974）;「第 22 次発掘調査－多賀城跡－」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1973

滝口卓（1990）;「市川橋遺跡調査報告書－平成元年度発掘調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第 24 集　多賀城市教育委員会

千葉孝弥（1990）;「新田遺跡ー第 4・11 次発掘調査報告書」『多賀城市文化財報告書』第 23 集　多賀城市教育委員会
千葉孝弥（1991）;「山王遺跡ー第 10 次発掘調査報告書」『多賀城市文化財報告書』第 27 集　多賀城市教育委員会
千葉孝弥（1992）;「山王遺跡一第 12 次発掘調査報告書」『多賀城市文化財報告書』第 30 集　多賀城市教育委員会
奈良国立文化財研究所（1984）;「木器集成図録ー近畿古代篇」『奈良国立文化財研究所史料』第 27 集
森貢喜（1982）;「水入遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 84 集　宮城県教育委員会

写　真　図　版

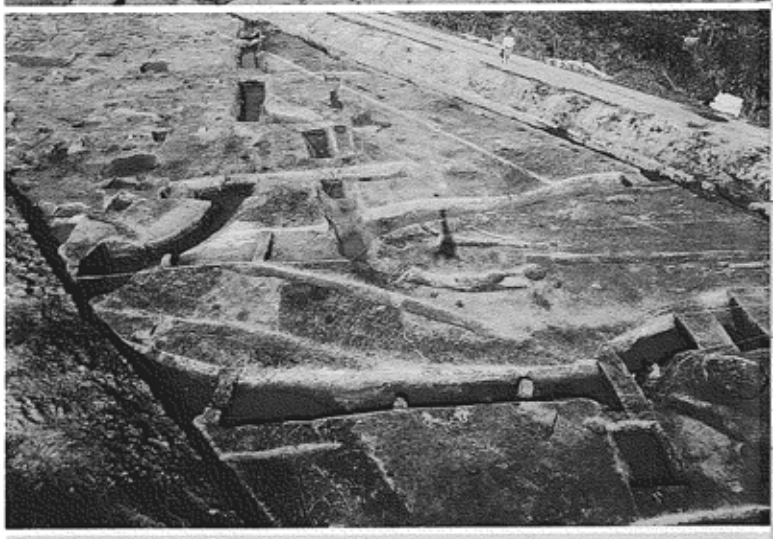
図版１　遺跡遠景（南から）



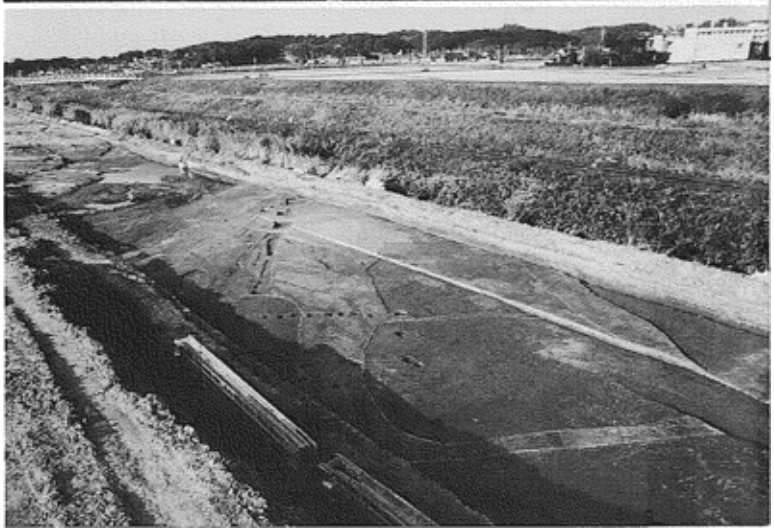
図版２　上からＡ区、Ｂ区、Ｃ区全景（右側が北）

西２道路・東西大路
交差点（東から）

西１・南１道路
交差点（南から）



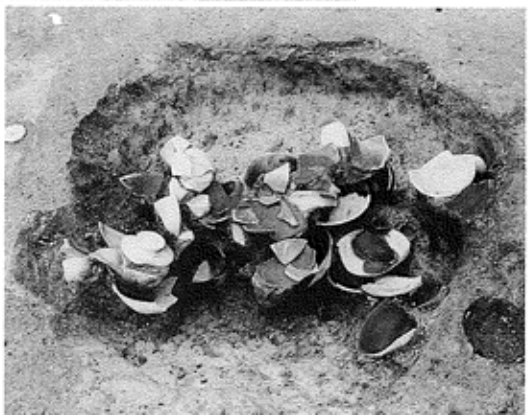
西０ａ道路（南から）



図版３

A区北東部遺構群（南から）
ＳＢ586
ＳＢ587

A区西半部遺構群（東から）
ＳＢ588
ＳＢ589



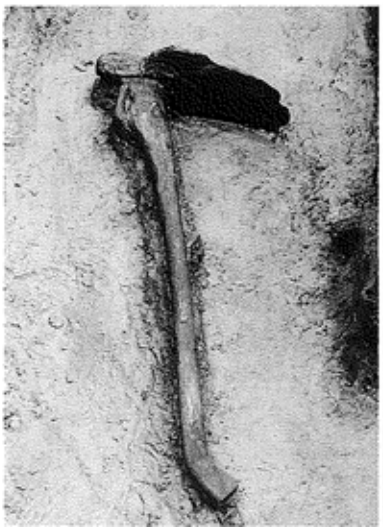
A区
左下・ＳＫ551
右下・ＳＫ507

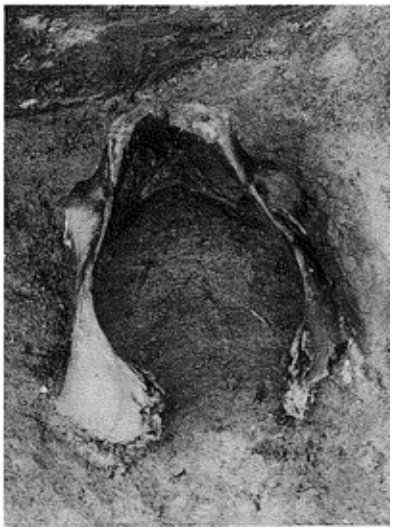
図版 4

B区中央部遺構群(上が北)
ＳＤ1020
ＳＢ1176
ＳＢ1086
ＳＢ1091

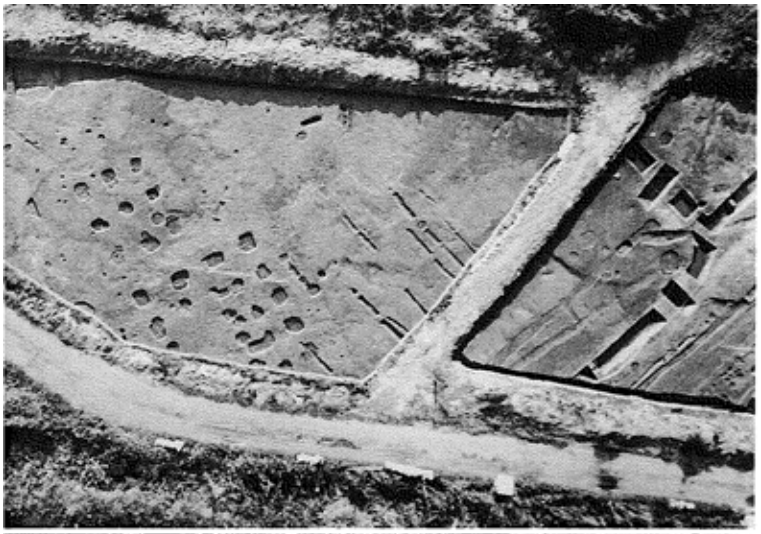
B区南東部遺構群(上が北)
ＳＢ1241
ＳＢ1242

左・鍬出土状況
（ＳＫ541）
右・ウマ出土状況
（ＳＸ10Ｃ側溝）



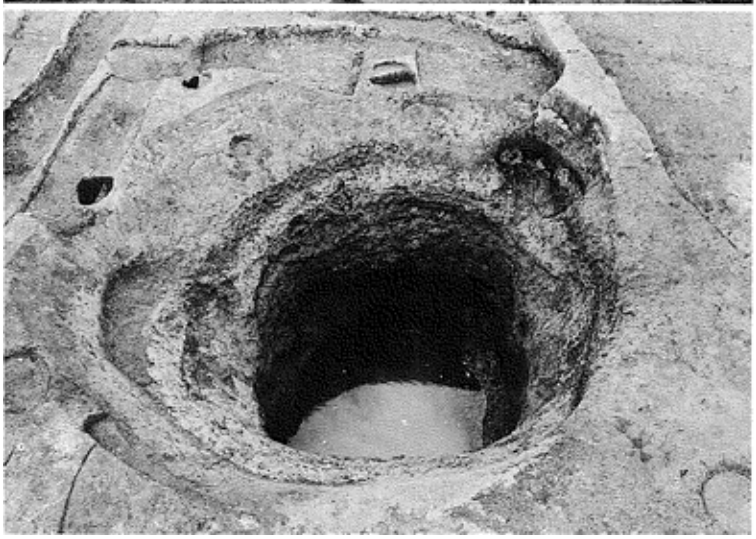


図版５



C区北西部遺構群（右側が北）
ＳＢ1553
ＳＢ1554
ＳＢ1555
ＳＢ1556

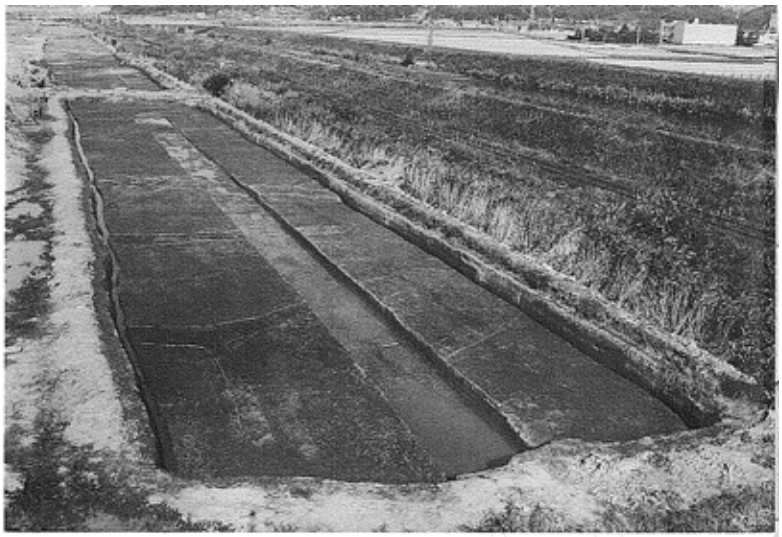
C区南東部遺構群（西から）
ＳＩ1639
ＳＩ1737



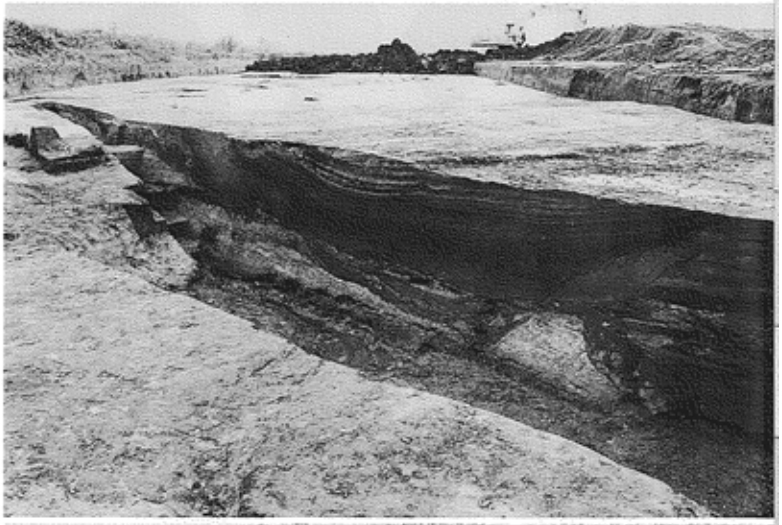
C区
ＳＥ1606井戸跡

図版６

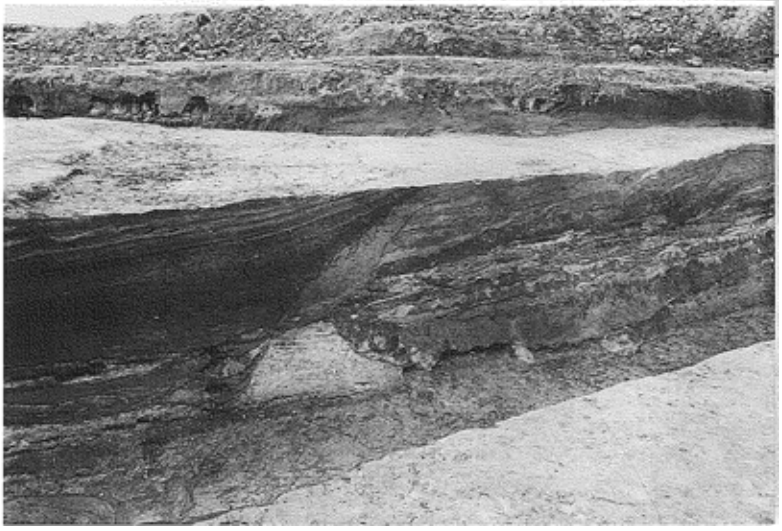
D区
水田跡（南から）



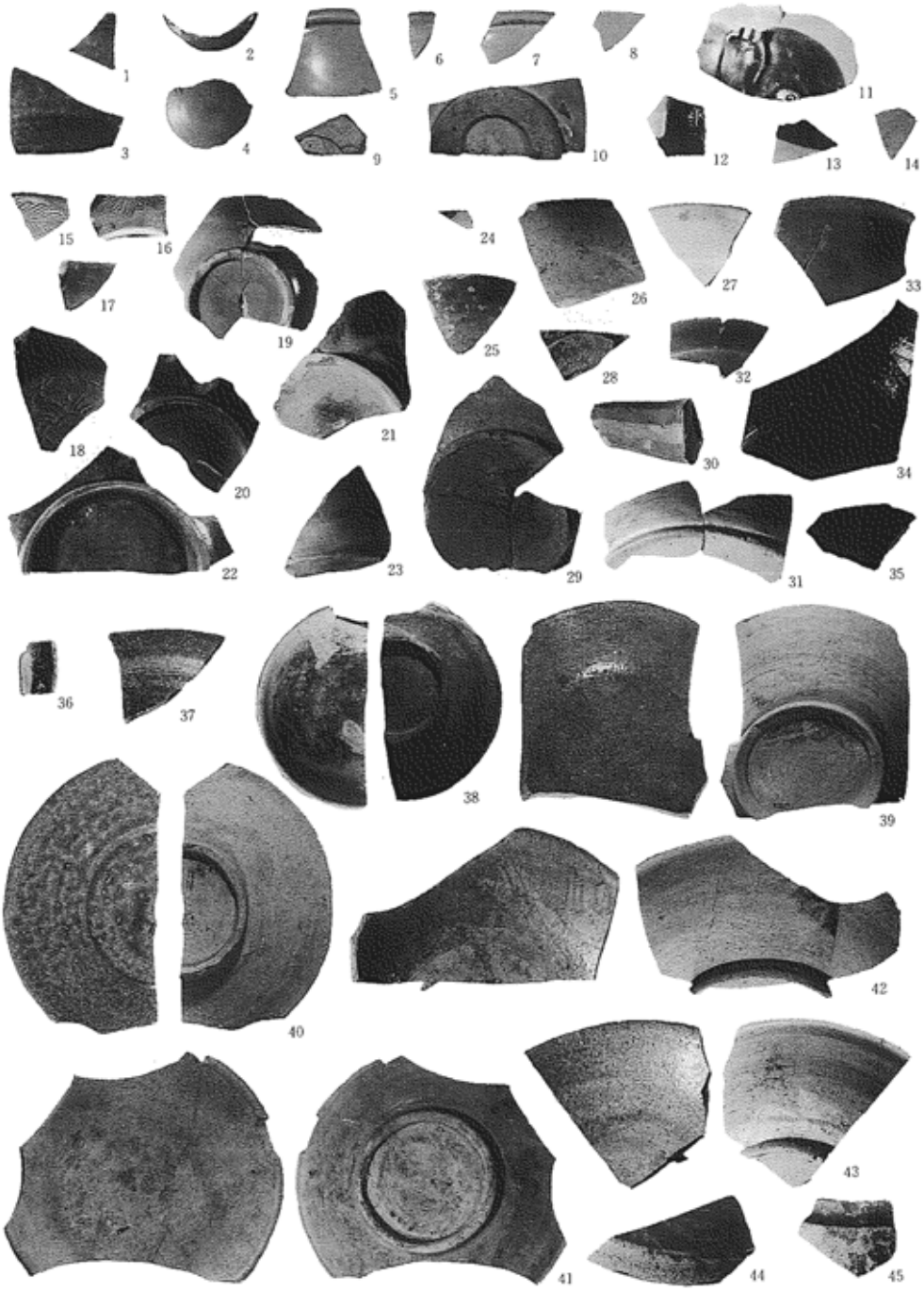
D区
ＳＤ2000Ｂ河川跡
（北から）



D区
ＳＤ2000Ａ河川跡
（北から）

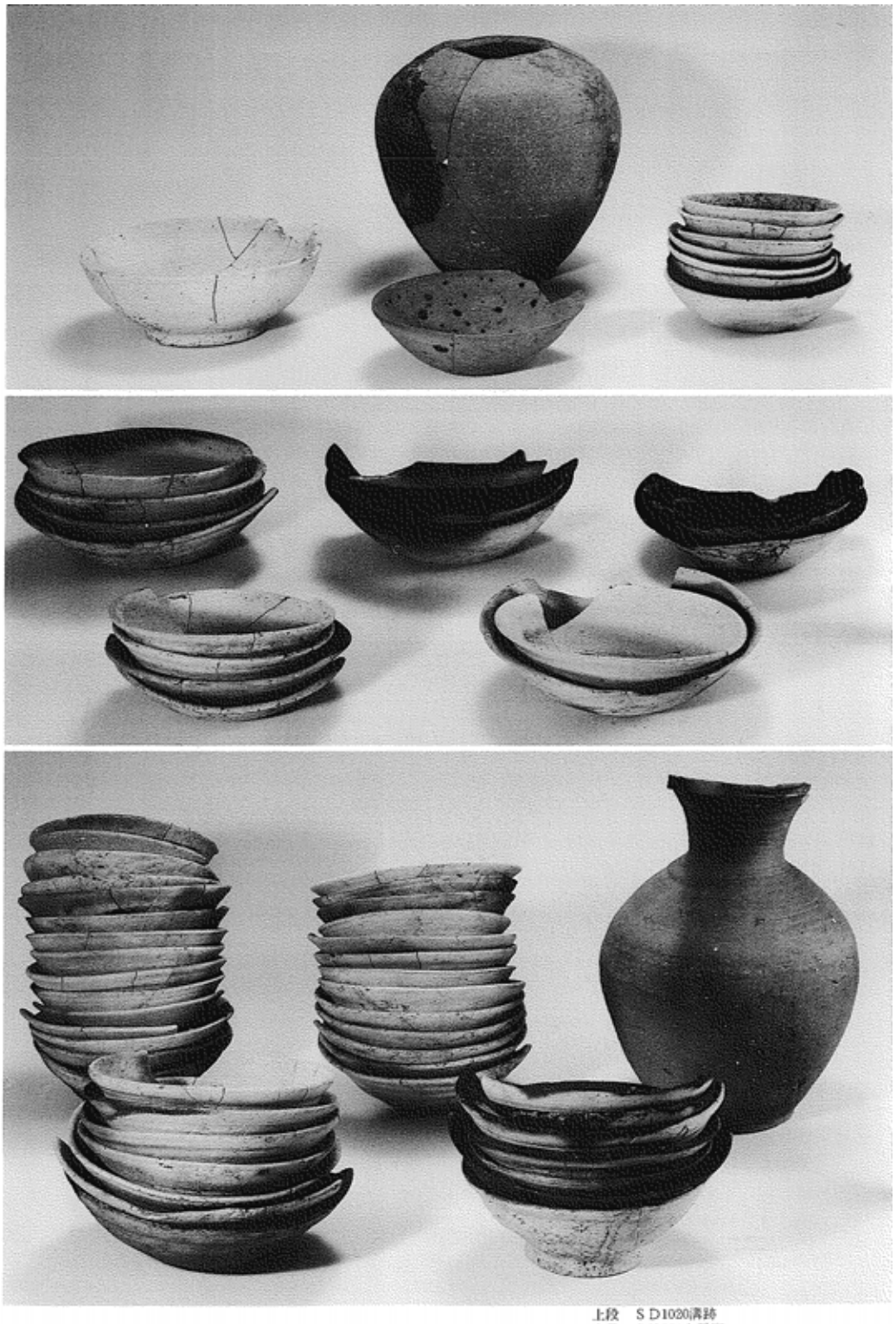


図版７



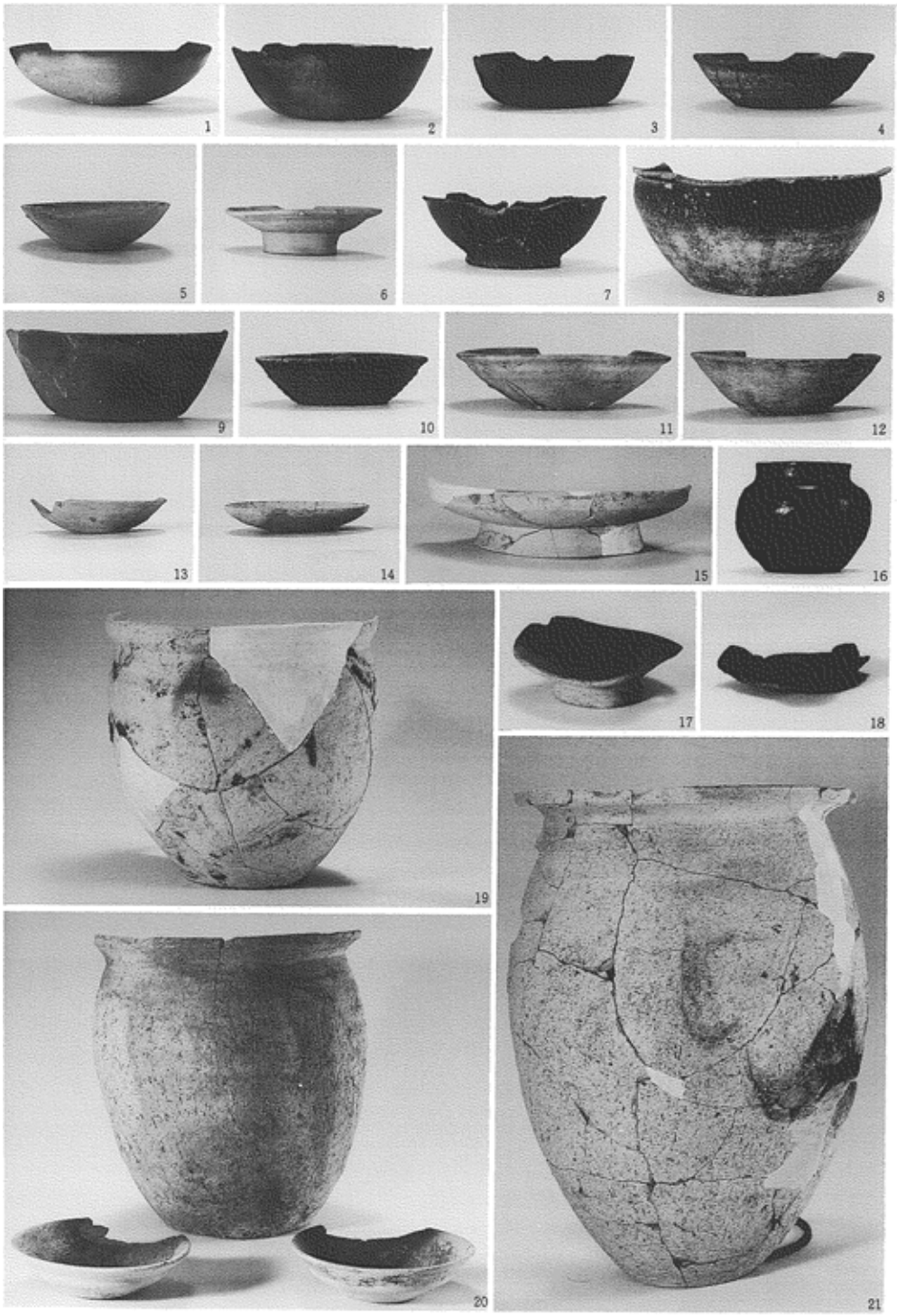
1～4 青磁、5～10白磁、11～14黄釉、15～23緑釉陶器（東海産）、24～35緑釉陶器（京都産）、36～45灰釉陶器　（縮尺3/5）

図版 8



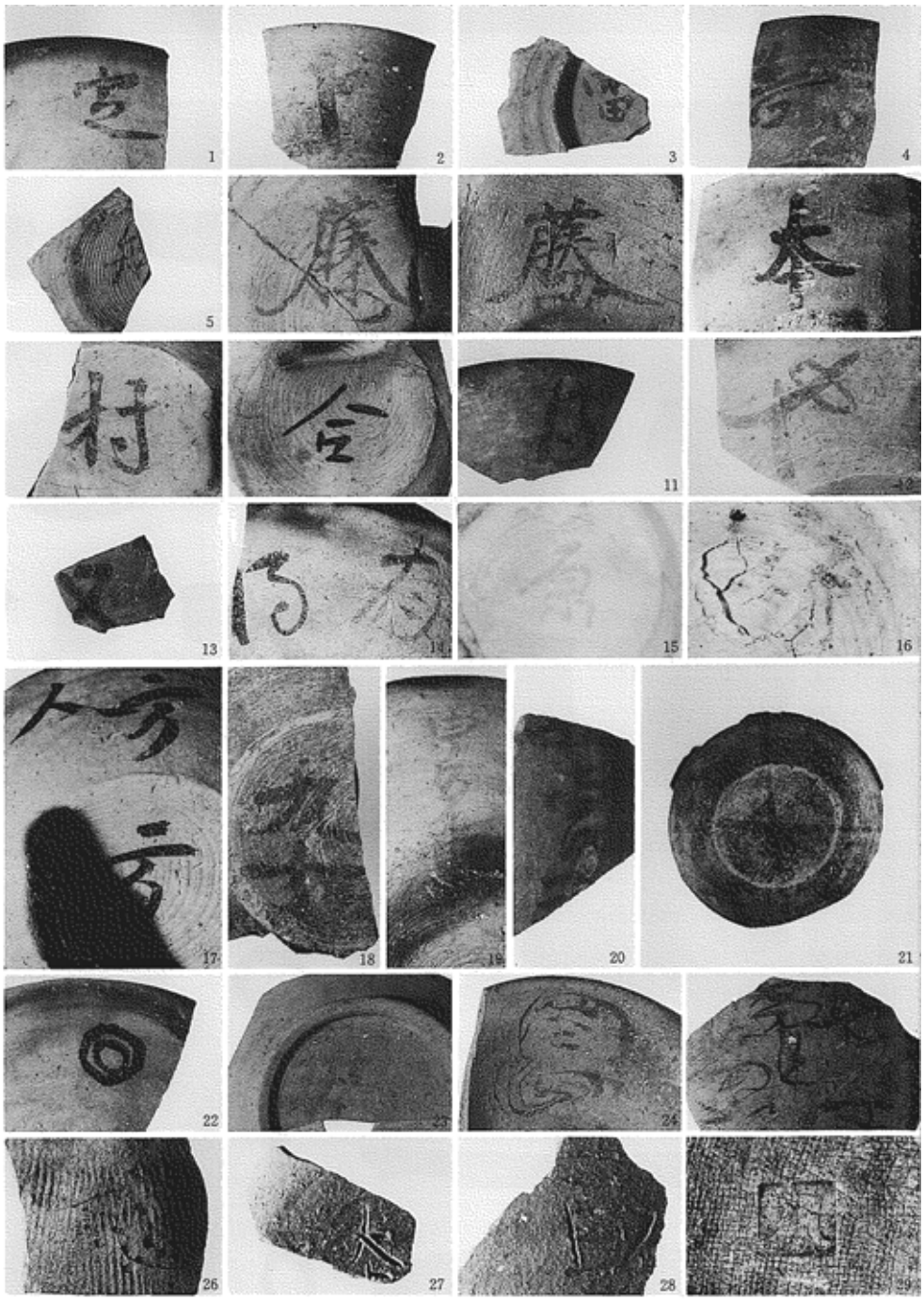
上段　ＳＤ1020溝跡
中段　ＳＫ551土器溜
下段　ＳＫ503土器溜　（縮尺約1/4）

図版９



1～8　河川跡（1・2土師器坏、3・4須恵器坏、5赤焼土器坏、6赤焼土器高台付皿、7土師器高台付坏、8須恵器鉢）
9～14　道路跡（9・10須恵器坏、11～13赤焼土器坏、14赤焼土器小皿）
19～21　土器埋設遺構（19土師器甕、20赤焼土器坏・土師器甕、21土師器甕）
15～18　その他の遺構（15赤焼土器高台付皿、16土師器短頸壺、17・18土師器耳皿）　（縮尺1/4、17・18は縮尺1/3）

図版10

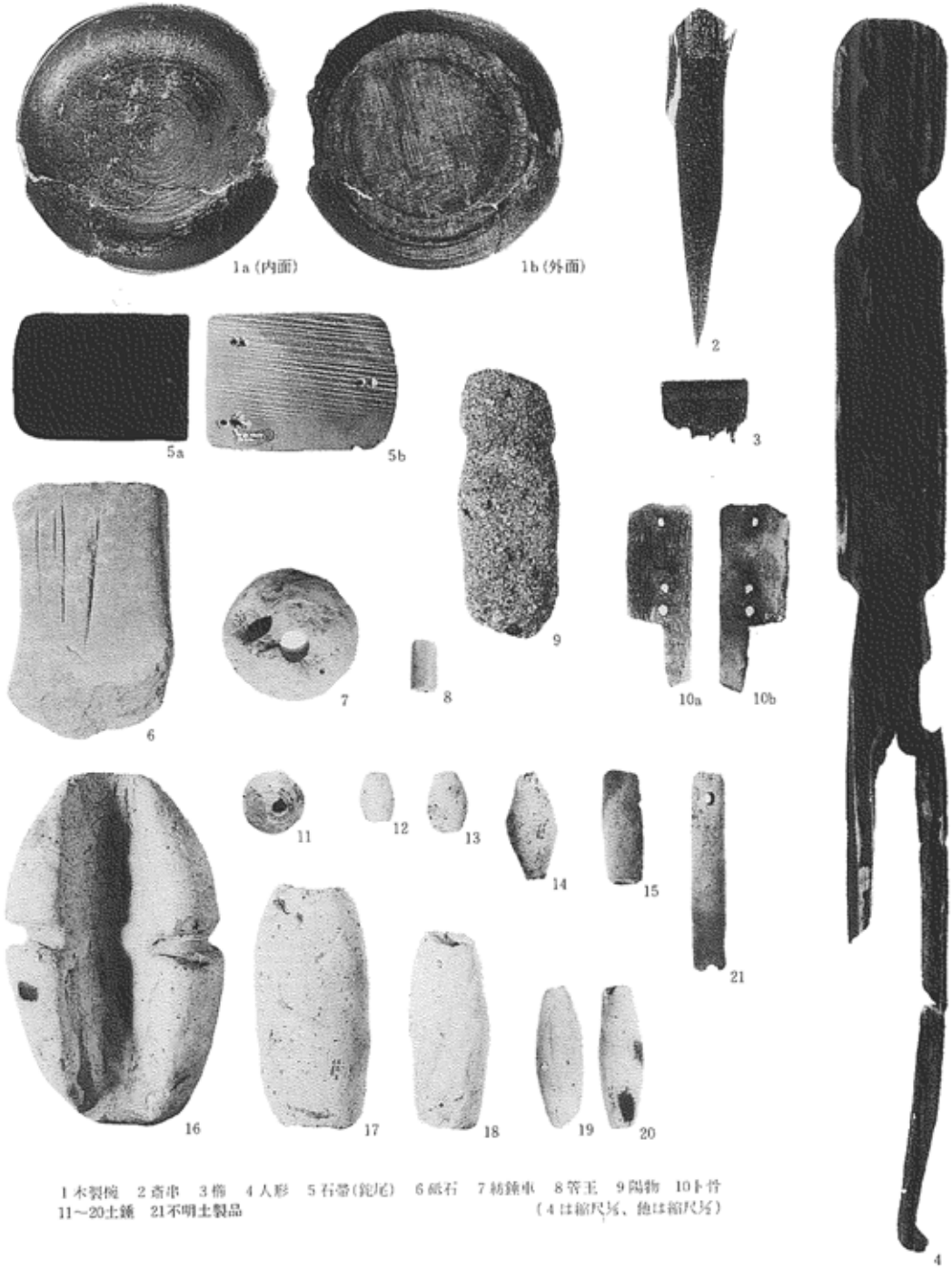


墨書土器 1「定」、2「上」、3「宮」、4「善」、5「□」船カ 、6・7「藤」、8「本」、9「村」、10「合」、11「得」
12「史」、13「又」、14「掛有」、15「原」(赤外線)、16「守」(赤外線)、17「人□」「□」、18「丸子」
19「宇多□□」東丸 カ、20「西曹司」、21「十」(記号)、22「◎」(記号)、23「⊞」(記号)、24絵 (人面?)、25習書
ヘラ書き土器 26「九」、27「大□」、28「□日」
刻印瓦 29「丸」

図版11

1～4軒丸瓦、5三足付皿、6羽釜、7底部に穿孔のある土器、8二面硯、9風字硯、10～17円面硯（縮尺与）
18・19刀子、20曲刃鎌、21馬具(引手)、22鉄鏃、23獣脚、24釘、25紡錘車（縮尺与）

図版12



1 木製椀　2 斎串　3 櫛　4 人形　5 石帯（銙尾）　6 砥石　7 紡錘車　8 管玉　9 陽物　10 卜骨
11～20土錘　21不明土製品
（4は縮尺1/4、他は縮尺1/2）

図版13